

## 鞍川E遺跡I

市道鞍川靈峰線バイパス整備事業に伴う発掘調査報告（1）

2012年3月

氷見市教育委員会

## 鞍川 E 遺跡 I

市道鞍川靈峰線バイパス整備事業に伴う発掘調査報告（1）

2012年3月

氷見市教育委員会

## 序

東に富山湾を隔てた笠峰立山を仰ぐ氷見市は、古くから海の幸、山の幸に恵まれ、人々の生活の場として、数多くの文化遺産を生み育んできました。郷土に残る文化財は先祖より受け継がれてきたものであり、私たちはあらためてその歴史的、文化的価値を再認識しながら、末永く子孫に引き継いでゆかねばなりません。

このたび発掘調査の対象となった鞍川地区は、地名の由来に木曾義仲にまつわる伝承が残り、室町・戦国時代の国人土豪、鞍河氏の本拠地と伝えられる地でもあります。また、周辺には縄文時代から中世にかけての遺跡が集中し、古くから上庄川下流域の平野部が人々に利用されてきたことを教えてくれます。

さて、この鞍川地区は、能越自動車道氷見ICのアクセス道路が地区内を横断し、また今年度には新たな金沢医科大学氷見市民病院が開業したこと、今後も開発が進められていくことが予想されます。こうした状況のなかにあって、教育委員会としては遺跡の保護と開発との調整に、より一層尽力していく必要があろうかと思います。

今回、鞍川E遺跡を対象として実施した発掘調査では、弥生時代終わりごろの土器がまとまって確認されたほか、古代の瓦塔破片が出土するなど、興味深い調査成果を残すことができました。これら調査の成果を、鞍川地区、ひいては氷見地域の歴史に思いを馳せる手がかりとしていただければ幸いです。

おわりに、今回の発掘調査にあたってご支援、ご尽力をいただいた方々に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

平成24年3月

氷見市教育委員会  
教育長 前辻 秋男

## 例　　言

- 1 本書は、平成23年度に実施した富山県氷見市轟川地内に所在する轟川E道跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、市道轟川霍峰線バイパス整備事業に先立ち、氷見市建設農林部建設課の依頼を受けて、氷見市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査は、氷見市教育委員会が主体となり、株式会社エイ・テックが担当した。
- 4 調査面積は840m<sup>2</sup>である。
- 5 調査期間は、平成23年10月31日より平成23年12月22日（実働31日）である。
- 6 調査事務局は、氷見市教育委員会生涯学習課に置き、課長補佐荒井市郎、副主幹大野 究、主任学芸員廣瀬直樹が調査業務を担当し、課長轟田栄治が統括した。
- 7 発掘調査担当者は次のとおりである。
- 監督員　　氷見市教育委員会 生涯学習課 廣瀬直樹  
管理技術者　株式会社エイ・テック 関田一広  
現場代理人　株式会社エイ・テック 吉田有里  
調査員　　株式会社エイ・テック 吉田 寿
- 8 整理作業は、遺物洗浄・注記等基礎的な作業は調査と並行して実施し、遺構図面作成、遺物実測、報告書作成・編集は調査終了後、平成24年3月まで実施した。
- 9 本書の執筆は、第1章・第2章第1節を廣瀬が、その他を吉田有里が担当し、編集は関田・吉田有里が行った。
- 10 自然科学分析は、貝・骨類の分析を株式会社パレオ・ラボ、南部久男氏・布村 昇氏（富山市科学博物館）の鑑定のもと、吉田有里が文章を作成した。
- 11 出土遺物と調査に関わる資料は、氷見市教育委員会生涯学習課が保管している。
- 12 遺跡の略号は「KRKE-2011」とした。
- 13 土層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色貼』に準じている。
- 14 遺物の施釉陶器の軸のかかる範囲は一点破線で表した。土器の赤彩が施してある範囲および石製品の磨り面は以下のスクリーントーンで示した。

土 器



赤 彩

石 製 品



磨 面

- 15 調査参加者は次のとおりである。

発掘作業員：栗屋弘信・上野恵美子・上野節子・満田みき子・上 俊男・河上外之・菊地繁則・清水不二雄・  
下野孝雄・瀬戸国男・高木行男・中川一美・中村亮昭・中村三郎・濱手克友・林 啓三・林 正雄・  
藤井久征・前田美智子・水上 操・水口敏行・宮本聰子・向 修誠・森川昌一・森 博明・  
轟敷幸子・山下 翼・山貫 弘 (以上、氷見市シルバー人材センター)  
発掘補助員：坂田智恵・松本真由美 (以上、株式会社エイ・テック)

整理作業員：上田恵子・坂田智恵・前馬みゆき・松本真由美・三島幸代・南 真弓・渡辺悦子  
(以上、株式会社エイ・テック)

- 16 調査・本書作成にあたり、下記の方々・機関から多大なご教示・ご協力を得た。記して感謝申し上げる。

高橋浩二・南部久男・西井龍儀・布村 昇・氷見市建設農林部建設課・氷見市シルバー人材センター

(敬称略、五十音順)

## 目 次

第1章：遺跡の環境	1
第1節：地理的環境	1
第2節：遺跡の歴史的環境	1
第2章：調査の概要	4
第1節：調査に至る経緯	4
第2節：調査の経過	4
第3章：調査の成果	6
第1節：基本層序	6
第2節：遺構	6
第3節：遺物	8
第4章：自然科学分析	11
第5章：まとめ	13
引用・参考文献	15
報告書抄録・奥付	

## 表 目 次

第1表 周辺遺跡対応表	2
第2表 貝骨類同定結果	11
第3表 遺物観察表（1）	16
第4表 遺物観察表（2）	17

## 図 目 次

第1図 周辺の遺跡	2
第2図 軽川地区の既往調査位置図	3
第3図 鞍川E遺跡 調査区位置・グリッド配置図	5
第4図 基本層序模式図	6
第5図 瓦塔復元案および類例	13
第6図 トチムキ石類例	14
第7図 調査区全体図	18
第8図 遺構配置図	19
第9図 調査区壁面土層断面図（1）	21
第10図 調査区壁面土層断面図（2）・SD01土層断面図	22
第11図 遺構実測図（1）	23
第12図 遺構実測図（2）	24
第13図 遺構実測図（3）	25
第14図 遺物実測図（1）	26
第15図 遺物実測図（2）	27
第16図 遺物実測図（3）	28
第17図 遺物実測図（4）	29
第18図 遺物実測図（5）	30
第19図 遺物実測図（6）	31

## 写 真 図 版 目 次

- 図版1 駿川E遺跡出土の動物遺体
- 図版2 遺跡周辺空中写真（1947米軍撮影）
- 図版3 遺跡周辺空中写真（1963国土地理院撮影）
- 図版4 1. 調査区遠景（東から）  
2. 調査区全景（垂直）
- 図版5 1. 調査区北東部全景（垂直）  
2. 調査区遺構検出状況（北から）
- 図版6 1. 調査区北側土層断面（西から）  
2. 調査区南側土層断面（西から）  
3. S D01土層断面b（南から）  
4. S D01土層断面d（南から）  
5. S D01遺物出土状況（1）（北東から）  
6. S D01遺物出土状況（2）（南東から）  
7. S D02土層断面b（南から）  
8. S D03・S D04完掘状況（北から）
- 図版7 1. S D03土層断面b（東から）  
2. S D04a・S P67上層断面（北から）  
3. S K01土層断面（南西から）  
4. S K01完掘状況（南から）  
5. S K02土層断面（南から）  
6. S K02完掘状況（南から）  
7. S K03土層断面（西から）  
8. S K03完掘状況（南から）
- 図版8 1. S K04土層断面（南から）  
2. S K06完掘状況（東から）  
3. S X01土層断面・完掘状況（東から）  
4. S P20土層断面（西から）  
5. 包含層遺物出土状況（1）（北西から）  
6. 包含層遺物出土状況（2）（東から）  
7. 作業風景  
8. 作業風景
- 図版9 遺物写真（1）
- 図版10 遺物写真（2）
- 図版11 遺物写真（3）
- 図版12 遺物写真（4）
- 図版13 遺物写真（5）

# 第1章 遺跡の環境

## 第1節 地理的環境

氷見市は、富山県の西北部に位置し、能登半島の基部東側にある。昭和27年の市制施行から昭和29年までに旧太田村を除く氷見郡1町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230km<sup>2</sup>、人口は約5万4千人である。市域は、北・西・南の三方が標高300~500mの丘陵に取り囲まれ、東側約20kmの海岸線をもって富山湾に面している。

鞍川E遺跡が所在する鞍川地区は、氷見市のほぼ中央を流れる上庄川下流南岸に位置する。河畔に平野が開け、背後には丘陵山地が連なる。上庄川は、氷見市南西端の大釜山(501.7m)に発し、約22kmで富山湾に注ぐ河川であり、氷見市では長さ・流域面積ともに最大である。

鞍川地区の北側に当たる上庄川下流左岸の加納地区の平野には、弥生時代から古代にかけて加納湯(仮称)という湯湖が所在したと推定される。加納湯は南北約1km、東西約0.5kmと推定され、さらに北側の余川川下流域に広がる可能性がある(氷見市1998・2000)。

鞍川E遺跡は、上庄川下流右岸の平野南端、標高約7mに立地し、背後には丘陵が迫る。平成21年度に氷見市教育委員会が実施した分布調査で発見された遺跡である。鞍川では昭和30年代に土地改良が実施され、整然とした水田が広がっている。調査対象地の北側には、能越自動車道氷見ICのアクセス道路として整備された一般国道415号(通称鞍川バイパス)が通る。また西側は、平成23年度に開業した金沢医科大学氷見市民病院の敷地となる。

## 第2節 遺跡の歴史的環境

上庄川流域の縄文時代の遺跡は上流丘陵部と下流域に散在している。下流域の縄文遺跡として縄文後期の鞍川寺田遺跡がある。有磯高校グランド造成工事で縄文土器が出土したというが詳細は不明である。

上庄川流域は弥生時代に入って積極的な土地利用が行われていったと考えられる。弥生時代中期の遺跡として鞍川中B遺跡がある。鞍川中B遺跡は加納湯に流れ込む流路のほとりの低地に営まれた遺跡と考えられる。弥生時代後期の遺跡として鞍川金谷遺跡が、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡として鞍川横羽毛遺跡、糠塚南遺跡、沖布A遺跡がある。いずれも加納湯を囲む丘陵縁辺部から微高地に営まれた遺跡である。また弥生時代終末期には、朝日山丘陵上に朝日大山遺跡が営まれた。

古墳時代には、上庄川流域から加納湯周辺にかけての丘陵上に多くの古墳が築かれた。その数は、上庄川流域で31群183基、加納湯周辺で6群71基となり、氷見市内で最も古墳が集中する地域である。これは、この地域が氷見市内で最も広く安定した平野が開け農業生産に適していたこと、白ヶ峰越えのルートをはじめとする能登と結ぶ街道がこの谷を通っていたことなどが要因と推測される。だが鞍川南方の丘陵上を見ると、丘陵の反対側の布勢瀬(現在の十二町湯)に面した朝日山周辺には古墳群が立地するものの、加納湯に面する鞍川側では古墳の存在は確認されていない。

古代・中世においても上庄川中下流域には遺跡が広く分布している。中世には上庄川流域から十二町湯周辺を範囲とする阿努莊という荘園があり、上庄川の水運、能登を結ぶ陸運などの要素を背景として古墳時代に引き続いて積極的な開発が行われていたと考えられる。鞍川D遺跡では13世紀代の集落が、鞍川中B遺跡では中世から近世の溜池状造構が見つかっている。なお、室町・戦国時代には、国人士豪鞍河氏が現在の鞍川周辺を本貫地としていたとされる。



第1図 周辺の遺跡 (S = 1 / 25,000)

地名	遺跡名	遺跡番号	種別	時代
1 須田川遺跡	304 舊市街	不明	大河内遺跡	古墳・中世
2 稲田川遺跡	250 荘園	古墳・中世	大野穴跡	古墳・古代
3 鹿田川上古遺跡	364 その他	佐佐原・中世・近世	大野穴跡	古墳
4 鶴田川上古遺跡	308 その他	中世・近世	44 久里見跡	中世
5 鶴田川中古遺跡	97 佐佐原	鷺文奈期	45 望山山頂遺跡	その他
6 鶴田川中古遺跡	139 その他	中世	46 上田吉野跡	古墳
7 菊川上古遺跡	190 佐佐原	中世	47 大野穴跡	古墳
8 菊川上古遺跡	138 その他	中世	48 今一宮口遺跡	古墳
9 菊川上古遺跡	224 佐佐原	中世	49 七町跡	古墳
10 菊川中古遺跡	52 佐佐原	佐佐原後期	50 鮎山山頂	城跡
11 K.R.~2・清瀬(反復)	309 佐佐原	古代	51 新大久山遺跡	中世
12 K.R.~3・清瀬(反復)	310 佐佐原	古代	52 道寺寺古跡群	佐佐原・近世
13 大野川上古遺跡	317 佐佐原	中世	53 上日吉山古跡群	古墳
14 神代川遺跡	368 佐佐原	中世	54 朝日山古跡群	古墳
15 沖水川遺跡	51 佐佐原	佐佐原・古代	55 明長山古跡	古墳
16 沖水川遺跡	92 佐佐原	古代	56 勝木水跡	古墳(准記前半)
17 沖水川遺跡	282 佐佐原	古代	57 勝木水跡	古墳(准記後)
18 朝日川茅野跡	261 佐佐原	佐佐原・吉野期	58 勝木水跡	古墳
19 猪俣川高瀬跡	253 佐佐原	佐佐原・吉野期	59 鮎山川跡	中世
20 中尾川谷口山内遺跡	46 佐佐原	佐佐原・吉野期・中世	60 今一宮跡	古墳
21 鳥居川中古遺跡	36 杜松	平安	61 田子の庭跡	古墳
22 小尼川上古遺跡・中世帯	344 佐和・裏	古墳・中世	62 日向山古跡	古墳
23 小川原子守川古跡	346 古墳	古墳	63 飛石山古跡	古墳
24 中尾川上古遺跡	916 佐和原	古墳・古代・中世	64 飛石山古跡	古墳
25 中尾川穴沢	46 桂木六番	古墳	65 飛石山古跡	古墳
26 中尾山・山鹿路	120 その他の(達納田)	中世	66 加須原古跡	古墳
27 中尾山・山鹿路	167 佐佐原	古代	67 加須原全賀跡	古墳
28 宮代川・通	82 城跡承徳後	不詳	68 田代三・前御跡	古墳
29 十二ノガヨリ古跡群	245 佐和	古墳	69 丹波三重屋跡	古墳
30 一二ノガヨリ古跡群	242 佐和	古墳	70 加須原中古遺跡・加須原跡	古墳・城跡
31 通横山古跡	257 佐佐原	古代	71 久保山古跡	古墳
32 通横山古跡	49 佐佐原	鷺文奈・古墳	72 佐佐原内部跡	古墳
33 境内古跡	41 佐佐原	古墳	73 佐佐原	鷺文奈・古代・中世・五箇
34 長吉古跡	42 古墳	古墳	74 佐佐原	古墳
35 猪塚古跡	329 古墳	古墳	75 七日一古跡	古墳
36 猪塚古跡	185 佐佐原	鷺文奈・古代	76 七日一古跡	古墳
37 猪塚古跡	256 佐佐原	古墳	77 七日一古跡・吉野	古墳
38 朝日川口古跡群	341 吉野	古墳	78 木の本城跡	城跡
39 中尾川谷古跡	342 古墳	古墳	79 開田所有地古跡	古墳
40 豊日遺跡	189 佐佐原	吉野・古代	80 加須原山古跡群	古墳
41 中尾川谷古跡	343 古墳	古墳	81 鮎穴堀穴墓	古墳・後古代

第1表 周辺遭跡対応表



第2図 鞍川地区の既往調査位置図 (S=1/2,500)

## 第2章 調査の概要

### 第1節 調査に至る経緯

平成19年に能越自動車道高岡北ICと氷見IC間が開通し、氷見ICのアクセス道路である鞍川バイパスの供用が開始されて以来、鞍川地区周辺の開発が加速している。特に今年、平成23年9月には金沢医科大学氷見市民病院がオープンしたことにより、今後もよりいっそうの開発事業が増えるものと予測される。

今回の調査原因となった市道鞍川靈峰線バイパス整備事業もその一環である。市道鞍川靈峰線バイパスは、国道415号バイパスを起点とし、市道氷見駅朝日線を経由して国道160号に連絡する路線であり、沿線には、本市の文化・観光の拠点施設である、ふれあいスポーツセンター・ふれあいの森がある。ふれあいスポーツセンターは、平成17年からの10年間、春の全国中学生ハンドボール選手権大会の会場として利用されるなど各種事業が展開されており、一年を通じ利用者が多い。このため、国道160号交差点においてかなりの渋滞が発生している。こうした事情を受け、国道160号と市道氷見駅朝日線交差点の渋滞解消に寄与するものとして、また氷見高校と有磯高校の再編統合により開校された新氷見高校のアクセス道路として、市道鞍川靈峰線バイパスの整備が計画された。

平成21年11月30日には、氷見市教育委員会が建設予定地周辺の分布調査を実施し、新たに鞍川E遺跡の存在が確認された。このため、鞍川バイパス建設に先立って本発掘調査が実施された鞍川D遺跡と合わせ、2か所の試掘調査が必要となった。試掘調査は、平成23年度に実施することで計画を進めた。

鞍川E遺跡・鞍川D遺跡いずれも、試掘調査予定地の用地は未買収であったため、地権者の承諾を得て調査を実施することになった。なお、鞍川E遺跡の一部区画では平成23年も耕作が予定されていたため、休耕する区画の試掘調査を先行することとし、7月に一次調査、秋以降の作物収穫後に二次調査を実施する計画とした。

一次の試掘調査は、鞍川E遺跡の中央～南側を対象とし、平成23年7月21日・22日の2日間で実施した。

二次の試掘調査は、鞍川E遺跡の北側と北西側の鞍川D遺跡を対象とし、平成23年11月9日・10日の2日間で実施した。試掘調査では、鞍川E遺跡の一次調査対象地で、遺構・遺物が確認された。そのため、7月の試掘調査終了後ただちに建設課と本調査の実施に向けた協議を開始した。

協議の結果、11月の二次調査の実施に先立ち本調査に着手することになった。そこで、一次調査で本調査が必要となった1,153m<sup>2</sup>のうち840m<sup>2</sup>を調査対象とし、年内の現地調査完了を目指して準備を進めていった。本調査は、氷見市教育委員会が主体となり、株式会社エイ・テックに業務委託して実施することになった。

### 第2節 調査の経過

#### (1) 調査の方法

本調査にあたっては、表土掘削後に世界測地系（測地成果2011）平面直角座標系第VII系を用いて5m間隔にグリッド杭を設定し、東西をX軸、南北をY軸とした。X軸方向に西からアラビア数字、Y軸方向に南からアルファベットを割り振ってグリッド番号を設定した（第3図）。

表土はバックホウで、遺物包含層は人力で掘削した。引き続き遺構を検出し、遺構略図を作成した。

遺構は、半裁もしくはセクションベルトを残して掘削し、土層を記録した後、完掘した。遺構の測量は空中写真測量で実施し、必要に応じてトータルステーションによる補備測量を実施した。

## (2) 調査の日程

平成23年10月31日より調査を開始した。バックホウによる表土掘削を開始し、11月1日に完了した。

11月2日に調査区周辺の整備として、草刈り・安全柵設置を実施した。また、翌日に実施するグリッド杭を打設するための基準点測量を実施した。

11月4日にグリッド杭を設置した。

11月7日より発掘作業員による遺構検出を実施した。

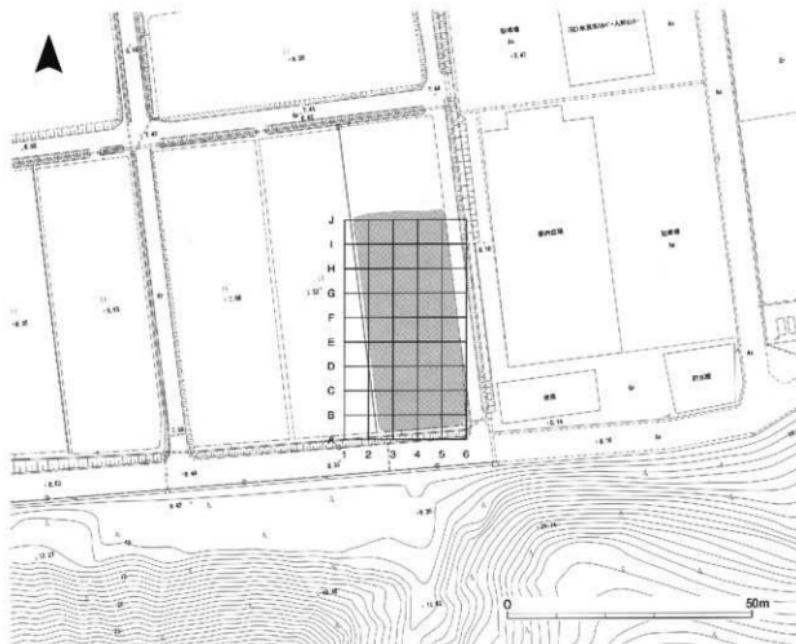
12月1日に電子平板による略測図を作成した。

12月2日に遺構検出状況写真を撮影し、遺構掘削を開始した。以後、平面図・断面図等の図面作成および遺物の取り上げを順次実施し、調査を進めた。

12月12日に自然流路S D01の掘削が完了した。

12月16日に全ての遺構を掘削し、12月19日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。

12月20・21日にかけて残りの測量作業等を実施し、資材を撤収して22日に調査を終了した。



第3図 鞍川E遺跡 調査区位置・グリッド配置図 (S=1/1,000)

## 第3章 調査の成果

### 第1節 基本層序

地山の地形は南から北へ向けて低くなっています。調査区南端から8mの位置から北側で、遺物包含層を確認できる。遺物包含層は地形に応じて堆積しており、厚さは最大40cmを測る。表土と遺物包含層の間には、造成土とみられる土を盛土している。

第I層：水田耕作土（にぶい黄褐色細粒砂質シルト）、第II層：造成土2層（灰黃褐色細粒砂質シルト・灰黃褐色粘質土）、第III層：遺物包含層（黒色細粒砂質シルト）、第IV層：地山（黄色中粒砂質シルト）である。遺構検出面は第IV層上面であ

る。南側の第IV層はしまりが強く、昭和30年代の土地改良の際に丘陵端部の基盤層を削って平地にした箇所と考えられる。第IV層には砂岩ブロックが混入しており、貝殻等の化石を含む。

### 第2節 遺構

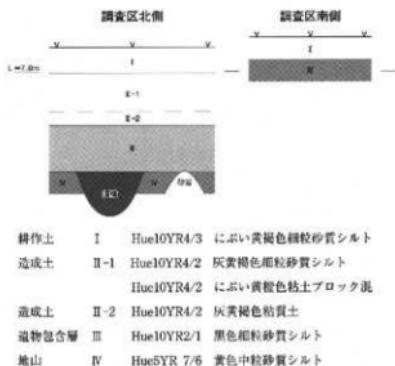
今回の調査では、自然流路・溝（SD）、土坑（SK）、ピット（SP）、性格不明遺構（SX）を検出した。調査区の南側は土地改良の影響を受けているため、自然流路SD01以外の遺構はほぼ確認できず、他の遺構は調査区北側に集中している。遺構の覆土は、中世以降に堆積したと考えられる第III層（遺物包含層）を埋土とする。第III層は弥生時代～中世の遺物を包含し、近代の遺物を含まないことがから、堆積時期は中世～近世の間に推定でき、これらの遺構の時期は中世～近世にかけてのものと推定できる。

遺構番号については、現地調査当時使用したものを本書でも使用しているため、番号が欠番となっているものがある。

#### 自然流路・溝

SD01（第8・9図） 調査区中央部、グリッドB3～J3の範囲に位置し、南北方向に流れる流路である。検出長41.46m、最大検出幅3.32m、深さ11～47cmを測る。調査区の南側は東西方向に延びる丘陵に南北方向の谷地形があり、この谷は自然流路SD01の延長線上に位置することから、SD01はこの谷からの流路と考えられる。埋土は黒色シルトを基調とする。流路の肩部や底面には砂岩ブロックが数箇所露出している。遺物は、弥生土器、古代土師器、古代須恵器、中世土師器、瓦質土器、珠洲焼、白磁、瀬戸美濃、瓦塔、不明土製品が出土している。

SD02（第11図） 調査区北西側、グリッドG4～I4の範囲に位置し、南北方向に流れる溝である。検出長11.34m、最大検出幅0.42m、深さ5～30cmを測り、南側をSK03に切られる。埋土は黒色シルトの単層である。遺物は弥生土器と土師器が出土しているが、小片のため図示していない。



第4図 基本層序模式図（S=1/40）

S D03 (第11図) 調査区南東側、グリッドC 5～D 5の範囲に位置し、コの字状に屈曲する溝である。検出した規模は、東西1.13m、南北4.95m、最大幅0.49m、深さ5～22cmを測り、東側は試掘トレントチ4に切られ、南側はS K06に切られる。北側の溝は調査区東壁に断面を確認できない。埋土は黒色シルトの単層である。遺物は出土していない。

S D04 (第11図) 調査区南東側、グリッドD 5の範囲に位置し、南北方向に流れる溝である。検出長3.31m、最大検出幅0.50m、深さ6～11cmを測り、S P66に切られる。埋土は黒色シルトの単層である。遺物は出土していない。

### 土坑

S K01 (第12図) 調査区南東側、グリッドD 4の範囲に位置する橢円形の土坑である。長軸0.84m、短軸0.65m、深さ39cmを測る。埋土は単層で、黒色シルトを基調とし、地山ブロックが混入する。遺物は弥生土器が出土している。

S K02 (第12図) 調査区北東側、グリッドG 4の範囲に位置する隅丸方形の土坑である。一辺1.00m、深さ64cmを測る。埋土は黒色シルトを基調とし、地山ブロックが混入する。遺物は弥生土器が出土しているが、小片のため図示していない。

S K03 (第12図) 調査区北東側、グリッドG 4の範囲に位置する円形の土坑である。長軸1.38m、短軸1.25m、深さ73cmを測り、北側でS D02を切る。埋土は黒色シルトを基調とし、地山ブロックが混入する。遺物は弥生土器、13世紀前半の中世土師器皿、鉄釘が出土している。弥生土器は小片のため図示していない。

S K04 (第12図) 調査区北東側、グリッドI 3の範囲に位置する円形の土坑である。長軸0.65m、短軸0.55m、深さ19cmを測る。埋土は黒色シルトの単層である。遺物は、弥生土器、13世紀中葉～13世紀後半頃の珠洲焼が出土している。

S K06 (第12図) 調査区南東側、C 5～D 5の範囲に位置する不整形の土坑である。検出長2.24m、検出最大幅1.11m、深さ47cmを測り、東側は調査区外へ延びる。埋土は黒色シルトを基調とする。遺物は、弥生土器が出土している。

### ピット

調査区内で総数73基のピットを検出した。調査区北東側および南東側でピットが集中しているが、建物跡等を構成するものはない。以下、遺物が出土しているものを詳述する。

S P20 (第13図) グリッドH 5の範囲に位置する。長軸51cm、短軸27cm、深さ42cmを測り、西側を試掘トレントチ4に切られる。埋土は黒色シルトの単層である。遺物は弥生土器が出土している。

S P61 (第13図) グリッドI 5の範囲に位置する。長軸30cm、短軸23cm、深さ17cmを測る。埋土は黒色シルトの単層である。遺物は弥生土器が出土している。

S P62 (第13図) グリッドH 5の範囲に位置する。直径25cm、深さ28cmを測る。埋土は黒色シルトの単層である。遺物は弥生土器が出土しているが、小片のため図示していない。

S P63 (第13図) グリッドH 5の範囲に位置する。直径25cm、深さ22cmを測る。埋土は黒色シルトである。遺物は弥生土器が若干出土しているが、全て小片のため図示していない。

## 性格不明遺構

S X01 (第13図) 調査区南東側、グリッドH 1の範囲に位置する。検出長2.62m、検出最大幅2.57m、検出面からの深さ62cmを測る。西側は調査区外へ延び、東端は試掘トレンチ1に切られる。土層は、レンズ状堆積をしており、溝の可能性がある。埋土は黒色シルトを基調とする。遺物は弥生土器、古代の土師器、不明土製品が出土している。

## 第3節 遺物

今回の調査では、弥生土器、古墳須恵器、古代須恵器、古代土師器、中世土師器、その他の陶磁器類、土製品、金属製品、石器、石製品、動物遺体など、遺物整理箱約20個分の遺物が出土している。本書ではそのうち98点を図示した。遺物の記載は種別ごとに行い、観察表にデータを記載した。

なお珠洲焼は吉岡康暢氏の器種分類および7期編年（吉岡1994）に準拠した。暦年代はⅠ期：12世紀紀後半、Ⅱ期：13世紀前半、Ⅲ期：13世紀中葉～1270年代、Ⅳ期：1280年代～1370年代、Ⅴ期：1380年代～1440年代、Ⅵ期：1450年代～1470年代、Ⅶ期：1480年代～1500年代と比定されている。

### (1) 土器・陶磁器類 (第14～19図)

#### 弥生土器

1～7は壺である。1～5は有段口縁の壺である。1は口縁部がわずかに外傾し、外面にミガキ、赤彩、平行沈線文を施し、内面にハケメを施す。2は口縁部が外反し、内外面にミガキを施す。3はやや外傾した口縁部は肥厚し、内外面にミガキを施す。4は口縁部は外傾し、器壁を薄く作る。5は口縁部は外反し、外面を有段部にハケメ、胴部にケズリを施す。6は付加状口縁の壺で、内面の頸部に指頭圧痕を施す。7は短頸壺で、内面がハケメ、外面の胴上部にヨコミガキ、胴下部にタテミガキを施す。

8～17は壺である。8～12は有段口縁の壺である。8は口縁部が外傾し、胴上部にハケメを施す。9・10は口縁部が直立し、有段部が肥厚し稜をなす。11は口縁部が内傾し、胴部は倒卵型で、底部は尖り気味に小さく作る。有段部には擬凹線文を施し、胴部は内面上半にヨコケズリ、内面下半にタテケズリを施し、外面上半にヨコハケ、外面上半にタテハケを施す。13は口縁部が外傾し、擬凹線文を施す。14～16は付加状口縁の壺である。17は「く」の字状口縁の壺で内外面にハケメを施す。

18～22は壺・壺・鉢類の底部である。19・20は外面にミガキを施し、20は内面にハケメを施し、壺と推定できる。20は外面に赤彩を施す。21は底部を穿孔している。22は壺壺類の底部である。

23～44は高杯である。23は有段口縁の高杯の杯部としたが、器台の受部の可能性もある。口径は43.2cmを測る。内外面に赤彩を施す。24～29は杯部である。24は口縁部は直線的に延びる。25・26は有段口縁の高杯で口縁部が大きく外反し、内外面にミガキを施す。27・28は口縁部がやや内湾する。27は内外面に赤彩を施す。28は口縁端部で内傾し稜をなす。29は口縁部が直線的に延び口唇面を形成する。内面と外面の口縁端部に赤彩を施す。30～34は脚部である。30は磨滅が著しく調整は不明である。31は内面にハケメを施し、外面にミガキを施す。32は外面にミガキを施した後赤彩を施す。33是有段部上面にヨコミガキを施し、それ以外はタテミガキを施す。34は裾端部が屈曲し水平に延び、襟端部上面に断面三角形の突帯を2条めぐらし、外面はミガキで赤彩を施す。35・36是有段口縁の高杯の杯部である。37・38は裾部である。37は5方向の透孔があり突帯にはキザミを施す。38是有段口縁の高杯の有段部で、外面はミガキで赤彩を施す。4方向に透孔がある。39～44は脚部である。41は外

面にミガキを施し、内面は輪積痕やしづり痕が残る。

45・46は有段鉢である。内面および口縁部の外面はナデ、体部外面は、ミガキを施す。

47・48は蓋である。47は内外面に、48は外面にそれぞれ赤彩を施す。

#### 須恵器

49～51は杯A身である。49は口縁部がわずかに外反する。52～54は杯B身である。52・54は低い高台が付く。53は断面長方形の低い高台を貼り付ける。55は杯B蓋である。直径15.0cmを測る。

56は壺・瓶類の底部である。高台は踏ん張る。

57～61は壺である。57は内外面に平行タキを施す。58は焼成は良好で暗赤褐色を呈し、外面に縦目タキ、内面に同心円文の押具痕が残る。色調・調整技法は水見市園カンデ窯跡出土の須恵器と類似する。59は口縁部に波状文を施し、口径61.0cmを測る。60は外面に格子目タキとカキメを施す。横瓶の可能性がある。

時期は、57・58は古墳時代後期の可能性があり、他は8世紀後半～9世紀代である。

#### 土師器

62・63は椀の底部で、回転糸切りを施す。

64は双耳瓶である。内面にカキメ、外面にハケメを施し、耳部が胴肩部に付く。9世紀前半のものである。

65・66は壺である。66は内外面にカキメを施す。

67は鍋である。内面にカキメを施す。口縁端部は口唇面を形成し、断面は方形である。8世紀後半～9世紀前半のものである。

#### 製塩土器

68～70は製塩土器である。外面は輪積痕が明瞭に残り、内面はナデを施す。

#### 中世以降の陶磁器類

71～82は珠洲焼である。

71～75は片口鉢である。71～74は口縁部である。73は口縁端部上面に、横描文を施す。74はオロシ目が5mm幅で7条である。75は内面の底近くに「中」記号が押印されている。

76～81は壺である。77はT種である。口縁端部をわずかに突出させ、断面三角形である。78は底部で、外面に輪積痕が残る。79～81はR種である。接合しないが同一個体の可能性がある。80は肩部に波状文を施す。

82は壺である。口縁部は強く屈曲し、口唇面を形成し、短く水平に挽き出す。

時期は、74はⅢ期に属するが、他はⅠ期～Ⅱ期に属する。

83～85は中世土師器皿である。83は非クロ成形で口縁部を二段ナデする。85は非クロ成形のものである。いずれも13世紀前半である。

86是中国製白磁碗である。口縁部に小さな玉縁を有する。11世紀末～12世紀のものである。

87・88は中国製青磁碗である。外面に鎬蓮弁文を施す。13世紀中頃～14世紀のものである。

89は瓦質土器の鉢である。底部外面に炭化物が付着する。

90は大窯期の瀬戸美濃の碗である。長石釉が施され、底部は貼付高台である。16世紀後半～17世紀初頭のものである。

#### (2) 土製品 (第18図)

91～93は不明土製品である。91は一方が直線的に外方へ開く筒状で、内面にヨコハケを、外面にタテハケを施す。同様の破片はS X01から11点出土している。92・93は胎土は1～2mmの砂粒を多く含み、焼成は軟質で同一のものと考えられる。92は断面方形の端部を有し、端部側の厚みは薄くなる。93の厚みは一定せず、強く外反する。いずれも内面にヨコハケを、外面にタテハケを施す。同様の破片は他にも3点出土している。

94は自然流路S D01から出土した瓦塔の屋蓋部である。須恵質で焼成は良好、胎土は密で、灰色を呈する。軸受け部はロクロナデ成形され、直径11.0cmを測る。丸瓦はすべて半截竹管状工具により引き出して表現する。現存する丸瓦表現は7条確認でき、瓦同士の縫目は表現していない。個々の丸瓦表現は残存最大長10.5cm、幅1.3cm、高さ0.4cmを測る。隅棟は断面長方形の粘土紐を貼りつけて表現し、垂木とともに削り出す。裏面は長さ2.4cm、幅1.5cmで台形状に切り出して垂木を表現している。

#### (3) 石製品 (第19図)

95は大型蛤刃石斧である。石材は安山岩である。刃部を欠損する。

96は緑色凝灰岩の剥片である。

97は敲石である。両端部に敲打痕、外面に製粉に使ったとみられる摩耗箇所や、細かな敲打痕が確認できる。石材は安山岩である。長さ10.8cm、幅9.2cm、最大厚6.6cmを測り、重さ1,124gを量る。

#### (4) 金属製品 (第19図)

98は鉄釘である。長さ4.7cm、幅0.8cmを測り、断面は長方形である。

## 第4章 自然科学分析

自然流路 S D01 埋土中および包含層中から動物遺体（骨・貝）が出土している。出土した貝骨類は、株式会社パレオ・ラボに同定を委託し中村賀太郎氏が同定を行った。また一部の資料を南部久男氏・布村昇氏（富山市科学博物館）に鑑定していただき、それぞれの結果をここにまとめて報告する。

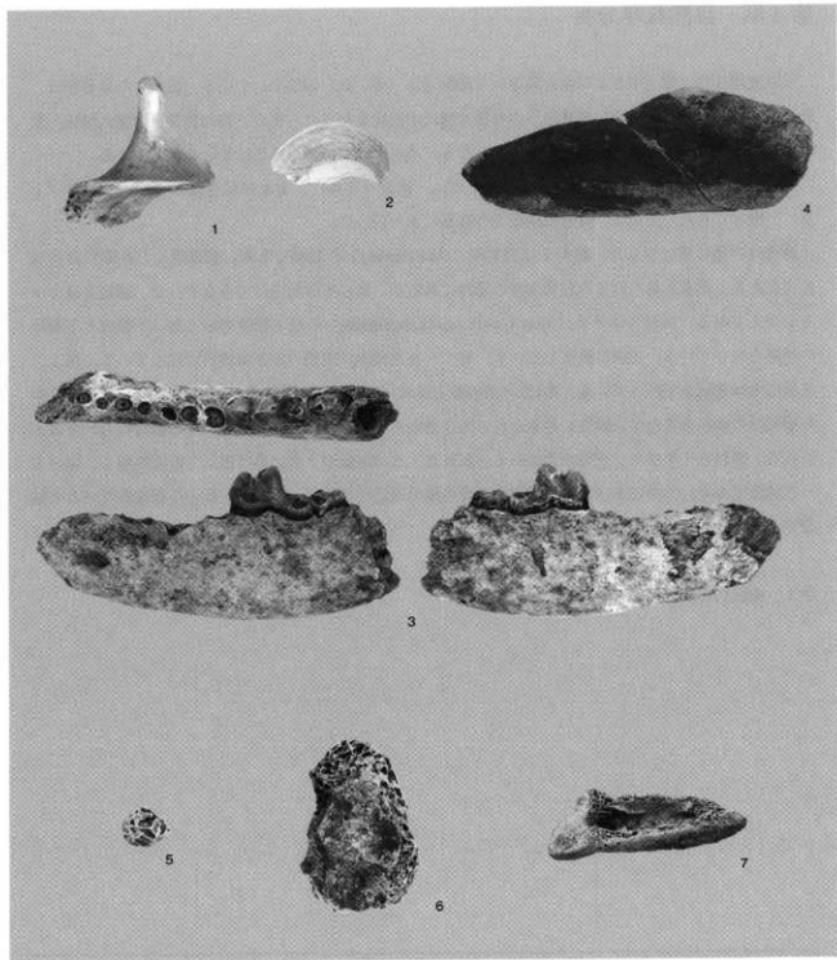
試料は自然流路 S D01 から出土した貝（1点）・歯骨（1点）、および包含層から出土した貝（1点）・歯骨（5点）である。同定は肉眼での観察により行った。

結果は、第2表に示した。試料1は腹足綱（Gastropoda）の殻軸である。殻は厚く、内面には真珠光沢がある。海産と見られる比較的大型の巻貝であるが、目以下の同定はできなかった。試料2はヤマトシジミである。試料3はイヌ（Canis lupus familiaris）の左下顎骨であった。下顎枝と下顎体の前部を欠いている。犬歯は脱落している。第1～4前臼歯は歯根のみが歯槽内に残っている。第1、2後臼歯は歯冠まで残っている。第1後臼歯の最大長は1.8cm、最大幅は0.73cmである。試料4は形状から哺乳類の前肢骨または大腿骨と考えられ、大きさからウシまたはウマなどの大型の動物のものと考えられる。試料5～7はクジラ類の骨である。試料5・6は組織が土中に溶け出して密度は粗く、髪が入った状態である。土中にあっても短期間では骨の成分は溶け出さず、数百年～数千年程度経てると推定できる<sup>11</sup>。

註1 南部久男氏より教示。

試料名	出土位置	分類群	部位	備考
試料1	流路 S D01	腹足綱（Gastropoda）	殻軸	
試料2	流路 S D01	ヤマトシジミ（Corbicula japonica）	殻	熱帯～寒帯、汽水域～海水まで広く生息
試料3	流路 S D01	イヌ（Canis lupus familiaris）	左下顎骨	
試料4	流路 S D01	大型哺乳類	前肢骨または大腿骨か	ウシまたはウマ？
試料5	流路 S D01	クジラ目（Cetacea）	不明	
試料6	第Ⅲ層	クジラ目（Cetacea）	不明	
試料7	第Ⅲ層	クジラ目（Cetacea）か？	不明	

第2表 貝骨類同定結果



図版1 鞍川E遺跡出土の動物遺体

1.腹足綱 2.ヤマトシジミ 3.イヌ 4.大型哺乳類 5~7.クジラ目

## 第5章 まとめ

今回の調査で得られた知見を整理しまとめにかえたい。

調査では、溝4条、土坑5基、ピット73基、不明遺構1基を確認した。ピットを多数検出したが、建物跡や規則性のあるものは確認できなかった。

自然流路S D01の埋土は黒褐色シルトを基調とし、この黒褐色シルトは第Ⅲ層（遺物包含層）に由来する。自然流路S D01から出土した遺物と第Ⅲ層中から出土した遺物がそれぞれ接合したことから、第Ⅲ層の堆積に伴い埋没したと推定できる。第Ⅲ層および自然流路S D01からは弥生土器・須恵器・土師器・珠洲焼・中世土師器・白磁・青磁・瀬戸美濃などが出土し、時期が最も新しいものは15世紀後半～16世紀初頭の瀬戸美濃であり、第Ⅲ層およびS D01の堆積は中世～近世と考えられる。

土坑SK03は、黒色細粒砂質シルトに地山ブロックが混入しており、人為的に廃された可能性があり、出土した遺物の時期と大きな時間差はないものと考える。出土した中世土師器皿の年代から、13世紀前半頃と位置付けできる。土坑SK02は遺物が出土していないが、遺構の形態・埋土の状況がよく似ており、同時期の遺構に位置付けられる。

調査では、弥生土器がまとめて出土し、器種には壺、甕、鉢、蓋、高杯等がある。本遺跡から出土した土器の特徴として、有段口縁の壺甕類の口縁部は直立しないしやや外傾し、有段部に擬凹線を施すものは少数であり、高杯は棒状脚が認められず杯部に24のような東海系の形式が認められることから、弥生時代終末期の白江式・漆町編年（田嶋1986・2006）の4・5群に相当する。

当遺跡からは古代の瓦塔が出土している。瓦塔は7世紀後半～10世紀初頭頃に盛行する仏教建築の層塔を模倣した高さ1～2mの土製の塔である。北陸では39遺跡から約260点が出土し、氷見市城では岩上遺跡、惣領浦之前遺跡からそれぞれ屋蓋部が出土している。善端直氏は北陸地方の瓦塔を集め、分析し、製作手法・形態差から編年試案を提示している（善端1994）。当遺跡出土の瓦塔の特徴として、①丸瓦は半截竹管状工具により引き出す、②垂木は一定間隔をおいて削り出し、垂先削り出し断面が台形で奥行が短く、③隅棟と隅木は粘土板削り出して表現する、④風鐸穴は表現しない、が考えられる。このような製作技法の組合せは、8世紀第4四半紀～9世紀第4四半紀に位置付けでき、自然流路S D01から出土している須恵器・土師器と矛盾しない。同様の製作方法の組み合わせを持つ類例として、氷見市惣領浦之前遺跡、南砺市高瀬遺跡、富山市向野池遺跡の出土例等があげられる。惣領浦之前出土例は垂木の奥行を長く削り出しており、当遺跡出土例より古相である。当遺跡出土のものは、軒先を若干欠くが垂先が残っており、軒先の欠損範囲は1cm程度と推定できるので、一辺の復元長は約46cmとなる。



第5図 瓦塔復元案および類例 (S=1/10)

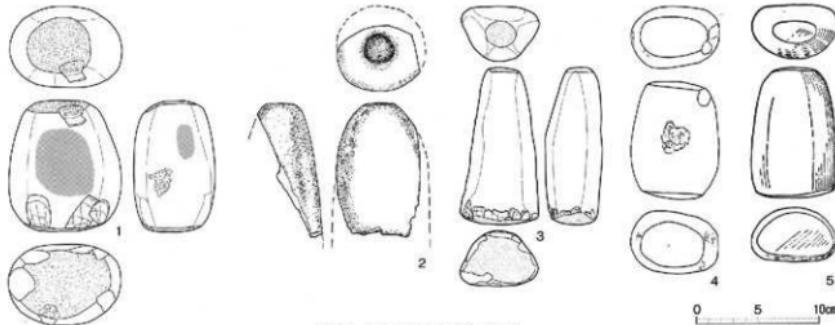
なお、どの階層のものは不明である。

不明土製品として紹介した遺物は、円筒形土製品または置きカマドの破片の可能性がある。円筒形土製品は、内面に粘土紐の接合痕を残すことが多い粗雑な調整の断面円形で中空の土製品であり、竪穴住居のカマド構築材（袖芯材・天井部材・煙道など）や支脚としての使用（春日2003）や、製鉄関連遺跡で送風管もしくは送風導入管としての使用（小杉町教育委員会1988他）が考えられている。県内では氷見市中尾新保谷内遺跡・高岡市戸出古戸出遺跡・富山市塙越A遺跡・射水市椎上遺跡等で確認されている。91は端部のみの出土であるが、内外面にハケメを施し、一方が外側へ開く円筒で、円筒形土製品の可能性がある。92・93は内外面にハケメを施し、分厚く外反するような形態で、置きカマドの可能性がある。氷見市域では中谷内遺跡・中尾新保谷内遺跡・神代羽連遺跡・柳田遺跡・万尾遺跡で置きカマドが確認されており、いずれも5世紀前半～6世紀代に属する。

中世の遺物では12世紀後半～13世紀前半の珠洲焼が多量に出土している。当遺跡周辺の同時期の遺跡では、集落遺跡の鞍川D遺跡がある。鞍川D遺跡は井戸跡・流路・溝・土坑などが出土しているが、建物跡などは確認されていない。集落の主体は鞍川D遺跡周辺にあったと考えられ（氷見市教育委員会2006a）、当遺跡はこの集落の辺縁部に位置する。

第Ⅲ層から出土した敲石は、トチの実の殻を剥ぐための民具であるトチムキ石と形状が酷似する。渡辺誠氏は、岐阜県白川村・莊川村のトチムキ石を敲打面の位置と、稜の有無で形態分類している（渡辺2005・1980）。当遺跡のものは両面に稜がない敲打面を形成しており、渡辺氏の分類によるとB a類となる。トチムキ石の出土例は、南砺市矢張下島遺跡の近世建物跡S B 02の土間と推定される土坑から出土している（南砺市教育委員会2005）。また、氷見市鞍川D遺跡では13世紀前半～13世紀後半に使用されていた井戸側の外側から、一方の端部に敲打痕が残る砾石器が出土しており（氷見市教育委員会2006a）、完形ではないが凹みが少ない敲打面からトチ等の堅果類の殻剥きに使用された可能性がある。また鞍川中B遺跡では、弥生時代中期の流路からオニグレルミとトチの種子が、中世の井戸跡からトチの種子が出土している（氷見市教育委員会2006b）。現在当遺跡周辺でトチを食す伝統は残っていないが、中世頃までは少なくともトチ等の堅果類を食していた可能性がある。

今回の調査では時期の明確な遺構が少なく、遺跡の性格を把握することはできなかったが、弥生時代終末期・古代～中世までの遺物が豊富に出土し、当遺跡周辺の人々の営みの変遷をうかがうことができた。



第6図 トチムキ石類例 (S=1/4)

1. 鞍川E遺跡 2. 氷見市鞍川D遺跡 (報告書より一部改変) 3. 南砺市矢張下島遺跡 4. 岐阜県莊川村 (民俗例) 5. 岐阜県白川村 (民俗例)

## 引用・参考文献

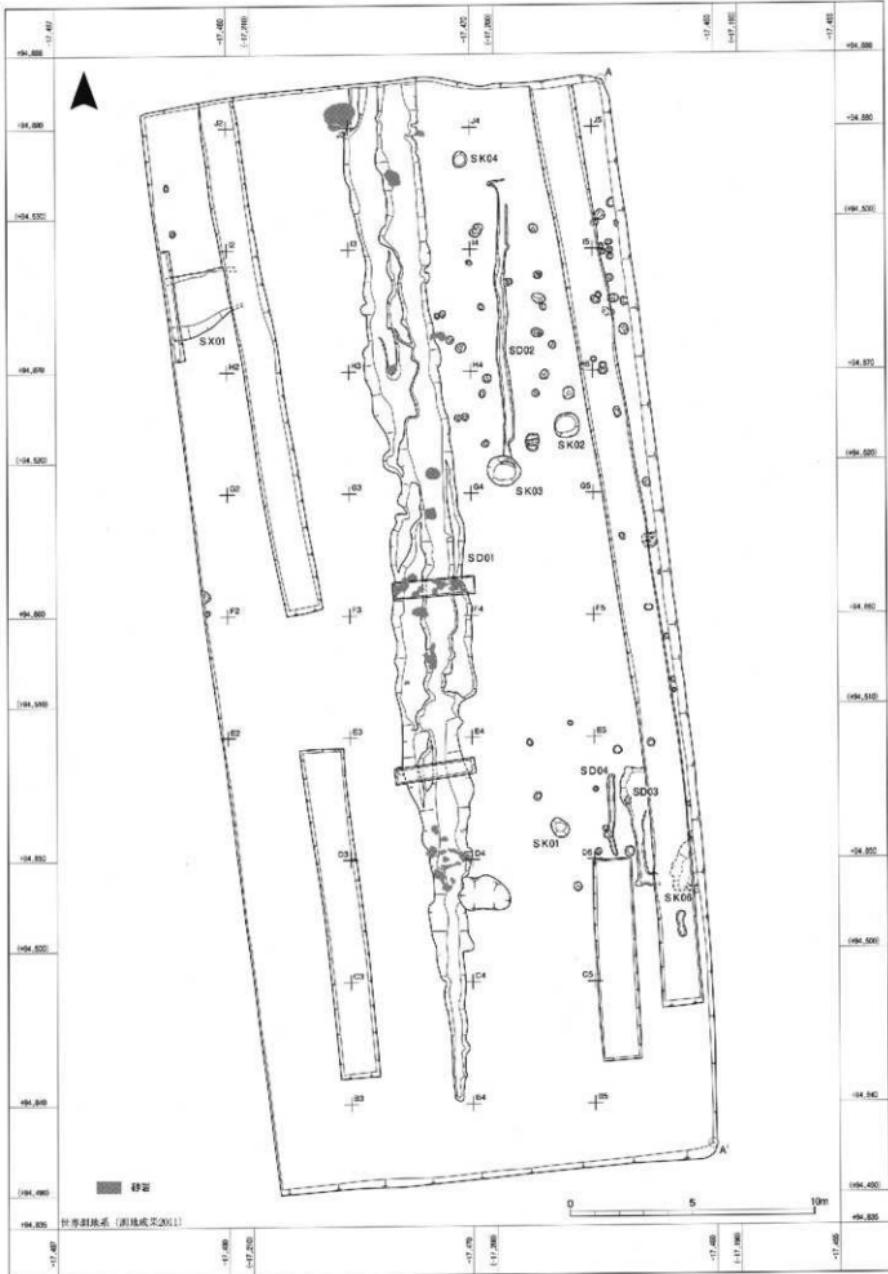
- 池谷勝典 2003 「唐石・敲石・石皿の実験考古学的研究」『株式会社アルカ創立10周年記念論集』株式会社アルカ
- 池野正男 2011 「古代集落における仏教施設と関連遺物」『大境』第30号 富山考古学会
- 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988 a 「シンポジウム 北陸古代土器研究の現状と課題」資料編
- 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988 b 「シンポジウム 北陸古代土器研究の現状と課題」報告編
- 春日真実 2003 「越後出土の円筒型土器品・板状土器品について」『富山大学論集 雜誌編 秋山進午先生古希記念』
- 秋山進午先生古希記念論集刊行会
- 金沢市・金沢市教育委員会 1996 「西志・南新保遺跡VI」 金沢市文化財紀要119
- 小杉町教育委員会 1988 「椎土遺跡・塚貝坪遺跡発掘調査概要」
- 善端 直 1994 「北陸の古代瓦塔」「文化財学論集」「文化財学論集刊行会
- 高岡市教育委員会 2000 「戸出古戸出遺跡調査概報」 高岡市埋蔵文化財調査概報第46番
- 高崎司 1989 「瓦塔小考」「考古学雑誌」第74巻第3号 日本考古学会
- 高島忠平・橋本正・舟崎久雄 1974 「井波町高瀬遺跡 入善町じょうべのま遺跡発掘調査報告」
- 『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』 富山県教育委員会
- 高橋浩二 2009 「古墳時代の越中」「古代の越中」 環日本海歴史民俗学叢書13 高志書院
- 田嶋明人 1986 「「」考察 -漆町遺跡出土土器の編年的考察-」「漆町遺跡I」 石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2006 「白江式再考」「古岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史」 桂書房
- 田辯昭三 1966 「陶邑古窯址群I」「平安学園考古クラブ
- 中世土器研究会 1995 「概説 中世の土器・陶磁器」 真陽社
- 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1996 「梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告(遺物編)」
- 埋蔵文化財発掘調査報告第7集
- 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2009 「中尾茅戸遺跡・中尾新保谷内遺跡・神明北遺跡・大野江瀬遺跡発掘調査報告」 岐阜県文化財発掘調査報告第41集
- 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2010 「懇領浦之前遺跡・懇領野際遺跡発掘調査報告」 第一分冊
- 埋蔵文化財発掘調査報告第45集
- 富山県埋蔵文化財センター 1992 「古沢バイパス開通遺跡発掘調査報告—中老田C遺跡—・坂越A遺跡—」
- 富山市教育委員会 2002 「富山市向野池遺跡発掘調査報告書」 富山市埋蔵文化財報告114
- 富山大学人文部考古学研究室 1989 「越中上末窯」 富山大学考古学研究報告第3冊
- 奈良国立文化財研究所・飛鳥資料館 1984 「小建塼の世界—埴輪から瓦塔まで—」 飛鳥資料館図録第12冊
- 南砺市教育委員会 2005 「矢張下島遺跡調査報告」 南砺市埋蔵文化財調査報告18
- 橋本正春 1995 「石名田木舟遺跡出土の宗教遺物について」『富山県福岡町石名田木舟遺跡発掘調査報告』
- 福岡町教育委員会
- 水見市 2002 「水見市史」7 資料編5考古
- 水見市教育委員会 2006 a 「鞍川D遺跡・鞍川バイパス遺跡群発掘調査報告II」 水見市埋蔵文化財調査報告第44番
- 水見市教育委員会 2006 b 「鞍川中B遺跡・鞍川中B遺跡群発掘調査報告III」 水見市埋蔵文化財調査報告第45番
- 水見市教育委員会 2010 a 「金沢医科大学水見市民病院建設事業に伴う試掘調査概要」
- 水見市埋蔵文化財調査報告第55冊
- 水見市教育委員会 2010 b 「鞍川中B遺跡II」 金沢医科大学水見市民病院建設事業に伴う発掘調査報告
- 水見市埋蔵文化財調査報告第57冊
- 水見市立博物館 2011 「特別展 半身呼の時代の水見—占塙出現前夜—」
- 婦中町教育委員会 2003 「富山県婦中町鍛冶町遺跡発掘調査報告」
- 堀沢祐一 2009 「越中國の祭祀・仏教関係遺跡と遺物」「古代の越中」 環日本海歴史民俗学叢書13 高志書院
- 森 薫 2005 「富山県の中世土器(資料編2)」「紀要 富山考古学研究」第8号 富山県文化振興財団
- 横山賢次郎・森田 駿 1978 「大宰府出土の輸入中国磁器について」「九州歴史資料館研究論集」4  
九州歴史資料館普及会
- 吉岡康暢 1991 「第1章 弥生・古墳時代の土器編年」「日本海域の土器・陶磁〔古代編〕」 六興出版
- 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」 吉岡弘文館
- 渡辺 賢 1980 「飛驒白川村のトチムキ石」「藤井祐介君追悼記念考古学論義」 藤井祐介君を偲ぶ会
- 渡辺 賢 2005 「飛驒白川村のトチムキ石」「長沢宏昌氏追憶記念考古論文集」
- 長沢宏昌氏追憶記念考古論文集刊行会

No.	地区	遺物	形態	個数	部類	計量 (cm)			胎土	焼成	色調	残存率
						口径	高さ	底径				
1	D 3	S D01	I 罐	陶生土器	壺	10.0	残存4.9	—	やや粗	良	外壁 10YR5/2 黄褐色 内部 2.5YR5/6 黄褐色	U 残部 1.5/12.0
2	J 1	—	II 罐	陶生土器	壺	10.6	残存7.3	—	やや粗	不良	10YR5/6 黄褐色	U 残部 3.5/12.0
3	D 4	—	I 罐	陶生土器	壺	12.0	残存0	—	やや粗	良	10YR5/3 黄褐色	U 残部 3.0/12.0
4	C 4	S K06	I 罐	陶生土器	壺	11.5	残存4.0	—	やや粗	やや不良	7.5YR5/4 にぶい褐色	U 残部 3.0/12.0
5	C 5	—	II 罐	陶生土器	壺	11.9	残存4.6	—	密	やや不良	10YR7/4 にぶい褐色	U 残部 2.7/12.0
6	C 4	S K06	I 罐	陶生土器	壺	—	残存4.4	—	やや粗	やや良	10YR7/2 黄褐色	U 残部 3.4/12.0
7	D 4	—	II 罐	陶生土器	壺	—	残存2.2	—	密	良	10YR5/4 淡褐色	U 残部 1.0/12.0
8	D 3	—	II 罐	陶生土器	壺	15.6	残存5.4	—	やや密	やや良	2.5YR5/3 褐色	U 残部 2.3/12.0
9	複数	—	—	陶生土器	壺	15.0	残存3	—	密	やや不良	5YR7/8 褐色	U 残部 3.6/12.0
10	C 4	S K06	I 罐	陶生土器	壺	14.4	残存4.4	—	やや粗	やや不良	2.5YR5/6 褐色	U 残部 6.0/12.0
11	D 4	—	I 罐	陶生土器	壺	15.0	2.1	—	密	良	7.5YR5/4 淡褐色	U 残部 12.0/12.0
12	C 4	S K06	I 罐	陶生土器	壺	17.3	残存3.9	—	やや密	やや不良	7.5YR5/6 淡褐色	U 残部 1.9/12.0
13	I 3	S K06	I 罐	陶生土器	壺	19.8	残存2.2	—	やや粗	やや良	7.5YR4/6 淡褐色	U 残部 1.6/12.0
14	C 3	S D01	I 罐	陶生土器	壺	15.9	残存3.3	—	密	良	10YR7/4 にぶい褐色	U 残部 1.8/12.0
15	C 4	S K06	I 罐	陶生土器	壺	17.6	残存4.0	—	やや粗	やや良	10YR5/6 黄褐色	U 残部 1.5/12.0
16	D 4	—	I 罐	陶生土器	壺	16.8	残存4.5	—	粗	不良	10YR4/2 黄褐色	U 残部 5.4/12.0
17	I 5	S D01	I 罐	陶生土器	壺	17.0	残存5.5	—	密	良	10YR7/2 明黄褐色	U 残部 2.6/12.0
18	D 4	—	II 罐	陶生土器	壺	—	残存6.2	4.0	密	やや不良	10YR7/6 明黄褐色	底 部 12.0/12.0
19	H 3	S D01	I 罐	陶生土器	壺	—	残存3.1	4.6	やや粗	良	内壁 10YR2/1 剥離色 外壁 7.5YR5/7 褐色	底 部 3.7/12.0
20	D 4	—	II 罐	陶生土器	壺	—	残存2.1	2.6	密	良	2.5YR5/6 明褐色	底 部 12.0/12.0
21	D 4	—	II 罐	陶生土器	壺	—	残存2.5	1.4	密	やや良	10YR5/4 黄褐色	底 部 7.5/12.0
22	H 4	S P20	I 罐	陶生土器	壺	—	残存3	8.6	密	やや不良	10YR5/4 明黄褐色	底 部 10.8/12.0
23	H 5	S P20	I 罐	陶生土器	壺	42.8	残存2.4	—	密	良	赤彩 10R5/2 紅色	U 残部 1.0/2.0
24	D 4	S K01	I 罐	陶生土器	壺	20.2	残存8.0	—	密	良	10YR2/2 白白色	U 残部 4.2/12.0
25	J 1	—	II 罐	陶生土器	壺	22.6	残存7.1	—	密	良	10YR5/3 淡褐色	U 残部 1.5/12.0
26	D 5	—	II 罐	陶生土器	壺	33.8	残存2.2	—	密	良	10YR5/4 淡褐色	U 残部 4.1/12.0
27	D 4	—	II 罐	陶生土器	壺	20.5	残存2.2	—	密	良	2.5YR5/6 明褐色	U 残部 2.2/12.0
28	D 3	—	I 罐	陶生土器	壺	21.6	残存5.0	—	やや粗	やや良	10YR5/4 西洋褐色	U 残部 1.7/12.0
29	D 4	—	I 罐	陶生土器	壺	20.2	残存3.6	—	密	良	10YR5/6 明褐色	U 残部 1.7/12.0
30	D 3	S D01	I 罐	陶生土器	壺	—	残存3.8	14.0	やや粗	やや良	7.5YR4/3 褐色	底 部 3.7/12.0
31	D 4	—	I 罐	陶生土器	壺	—	残存3.1	14.0	やや粗	良	10YR5/4 西洋褐色	底 部 10.8/12.0
32	D 4	—	II 罐	陶生土器	壺	—	残存2.1	13.2	密	良	10YR7/4 にぶい褐色	底 部 4.0/12.0
33	J 1	—	II 罐	陶生土器	壺	16.3	残存6.0	—	密	良	赤彩 2.5YR4/6 南褐色	底 部 0.1/12.0
34	D 4	—	II 罐	陶生土器	壺	—	残存2.3	17.3	密	良	10YR7/3 にぶい褐色	底 部 8.2/12.0
35	C 3	S D01	I 罐	陶生土器	壺	—	残存3.3	—	密	やや良	赤彩 10R4/6 赤色	—
36	D 3	S D01	I 罐	陶生土器	壺	—	残存2.6	—	密	やや不良	10YR7/5 明褐色	—
37	I 2	—	—	陶生土器	壺	—	残存5.7	—	密	良	10YR7/6 别有褐色	—
38	D 5	—	II 罐	陶生土器	壺	—	残存3.6	—	密	良	赤彩 10R5/6 灰色	—
39	I 4	—	II 罐	陶生土器	壺	—	残存5.5	—	やや粗	やや不良	7.5YR5/6 褐色	—
40	E 3	S D01	I 罐	陶生土器	壺	—	残存5.0	—	密	良	5YR7/8 褐色	—
41	D 4	—	I 罐	陶生土器	壺	—	残存6.3	—	密	良	7.5YR5/6 褐色	—
42	I 3	S D01	I 罐	陶生土器	壺	—	残存6.8	—	やや粗	良	10YR7/4 にぶい褐色	—
43	D 4	—	I 罐	陶生土器	壺	—	残存4.2	—	やや粗	良	7.5YR5/6 淡褐色	—
44	C 4	S K06	I 罐	陶生土器	壺	—	残存5.5	—	密	良	赤彩 10R5/6 褐色	—
45	D 4	—	II 罐	陶生土器	壺	16.3	残存5.9	—	密	良	10YR7/4 にぶい褐色	U 残部 2.8/12.0
46	D 4	—	II 罐	陶生土器	壺	17.9	7.3	1.8	密	良	7.5YR5/6 浅黃褐色	U 残部 9.6/12.0
47	H 1	S X01	I 罐	陶生土器	壺	—	残存3.0	—	やや粗	良	10YR7/2 にぶい褐色	つまみ部 12.0/12.0
48	I 4	—	II 罐	陶生土器	壺	—	残存2.6	—	密	良	10YR5/6 浅褐色	つまみ部 7.0/12.0
49	I 3	—	—	陶生土器	壺	18.0	残存3.3	—	密	良	10R0/1 青灰色	U 残部 1.3/12.0
50	I 5	—	—	陶生土器	壺	12.8	3.5	8.3	密	良	N7/ 灰色	U 残部 5.5/12.0
51	I 3	S D01	I 罐	陶生土器	壺	—	残存1.6	7.4	やや粗	やや不良	N8/ 白灰色	底 部 6.7/12.0
52	D 3	—	—	陶生土器	壺	—	残存1.3	9.2	密	良	10R0/1 白灰色	底 部 2.7/12.0
53	I 3	S D01	I 罐	陶生土器	壺	—	残存1.4	8.7	密	良	10R0/1 白灰色	底 部 4.3/12.0
54	C 3	S D01	I 罐	陶生土器	壺	—	残存3.7	10.0	密	良	10R0/1 青灰色	—
55	D 3	S D01	I 罐	陶生土器	壺	15.0	残存1.8	—	密	良	10R0/1 明青灰色	U 残部 7.2/12.0
56	B 3	—	—	陶生土器	壺	—	残存3.8	12.8	密	良	10R0/1 带青灰色	—
57	—	—	—	陶生土器	壺	—	—	—	密	良	10R0/3.5/ 带青灰色	—
58	I 3	S D01	I 罐	陶生土器	壺	—	—	—	密	良	5YR5/1 黑灰	—
59	F 3	—	—	陶生土器	壺	59.0	残存3.1	—	密	良	N4/ 灰色	U 残部 0.2/12.0
60	G 4	—	—	陶生土器	壺	—	—	—	密	良	10R0/7/ 明青灰色	—
61	G 3	S D01	I 罐	陶生土器	壺	—	—	—	密	良	N5/ 灰色	—
62	H 1	S X01	I 罐	陶生土器	壺	—	残存1.1	3.2	密	良	5YR7/6 褐色	底 部 9.4/12.0
63	H 1	S X01	I 罐	陶生土器	壺	—	残存1.2	4.7	やや粗	やや良	10YR7/3 にぶい褐色	底 部 12.0/12.0
64	K 3	S D01	I 罐	陶生土器	壺	—	残存0.6	—	密	やや良	5YR7/8 褐色	—
65	D 3	S D01	I 罐	陶生土器	壺	18.5	残存5.9	—	密	やや良	7.5YR7/6 褐色	底 部 2.0/12.0
66	D 3	S D01	I 罐	陶生土器	壺	21.4	残存6.7	—	密	良	10YR7/4 にぶい褐色	U 残部 1.3/12.0
67	K 3	S D01	I 罐	陶生土器	壺	44.2	残存5.2	—	密	良	5YR7/8 褐色	U 残部 0.5/12.0
68	E 3	S D01	I 罐	陶生土器	壺	—	—	—	やや粗	やや不良	5YR6/5 褐色	—
69	D 3	—	—	陶生土器	壺	—	—	—	密	やや良	5YR5/8 明小褐色	—
70	D 3	S D01	I 罐	陶生土器	壺	—	—	—	粗	やや良	5YR7/5 褐色	—
71	D 3	S D01	I 罐	陶生土器	壺	18.0	残存7.6	—	密	良	10B05/1 青灰色	U 残部 3.2/12.0
72	F 3	S D01	I 罐	陶生土器	壺	18.8	残存5.8	—	密	良	N7/ 灰白色	U 残部 1.4/12.0

第3表 遺物観察表(1)

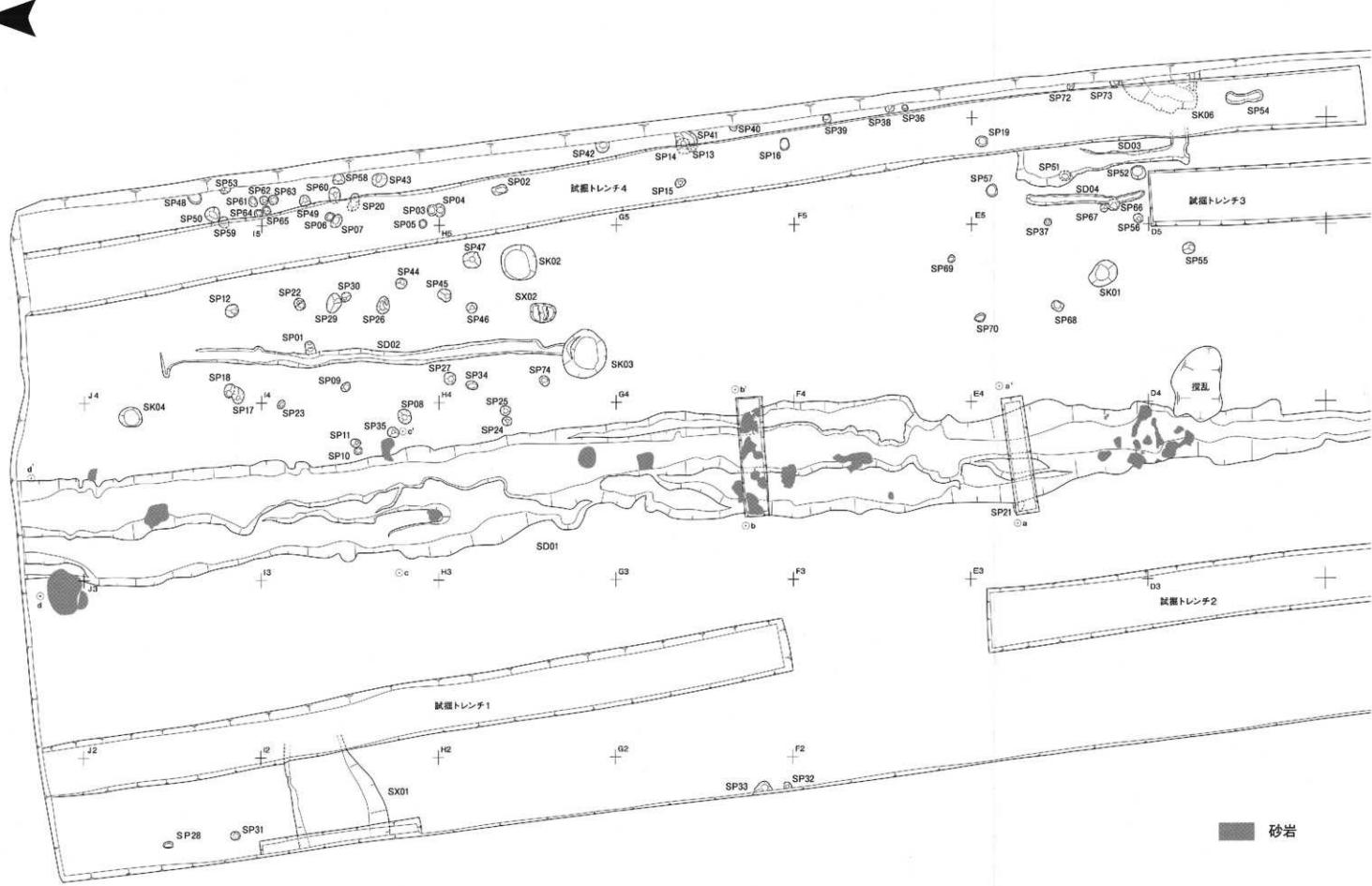
No	地区	地層	層位	種別	特徴	寸法(cm)			胎土	焼成	色調	残存率
						口径	最高	底面				
73	E 3	S D01	1層	陶片	鉢	21.6	高54.3	—	密	灰	108GS/1 黒灰色	口縁部 1.5/12.0
74	I 3	S K01	1層	陶片	鉢	—	—	—	密	灰	108G4/1 暗青灰色	—
75	C 3	S D01	1層	陶片	盤	—	残高4.6	9.0	密	灰	N6/ 灰色	底 部 3.0/12.0
76	I 3	S D01	1層	陶片	鉢	—	底径5.1	7.6	密	灰	SUE/1 黒灰色	底 部 2.0/12.0
77	D 3	S D01	1層	陶片	盤	22.0	残高9.5	—	密	灰	108G6/1 黑灰色	口縁部 2.5/12.0
78	B 3	S D01	1層	陶片	盤	—	残高3.5	11.6	密	灰	N7/ 灰白色	底 部 1.6/12.0
79	F 4	—	—	陶片	盤	7.2	残高3.1	—	密	中々灰	NE/ 灰色	口縁部 3.7/12.0
80	E 3	S D01	1層	陶片	盤	—	残高10.5	—	密	灰	NE/ 灰色	—
81	G 3	S D01	1層	陶片	盤	—	残高7.1	8.5	密	灰	NE/ 灰色	底 部 8.2/12.0
82	F 3	—	—	陶片	盤	42.1	残高5.0	—	密	灰	108G5/1 黒灰色	口縁部 1.0/12.0
83	G 4	S K03	2層	土器部	皿	8.2	1.6	4.4	密	中々良	107RS/3 淡黄褐色	口縁部 4.5/12.0
84	F 6	—	—	土器部	皿	8.4	1.0	—	密	中々良	7.5YR7/6 黄色	口縁部 3.9/12.0
85	E 3	S D01	1層	土器部	皿	11.6	2.5	7.2	密	中々不良	107RF/3 にぶい黄褐色	口縁部 3.5/12.0
86	I 3	S D01	1層	白磁	碗	17.0	残存2.2	—	密	良	7.5YR1/1 灰白色	口縁部 0.7/12.0
87	I 5	—	—	青磁	碗	16.0	残存7.8	—	密	良	7.5YR2/2 灰白色	—
88	D 5	—	I層	青磁	碗	15.0	残存1.6	—	密	良	N7/ 白灰色	口縁部 0.3/12.0
89	D 3	S D01	1層	瓦質土器	鉢	—	残存2.8	7.9	密	中々良	7.5G7Y1/1 オリーブ灰色	口縁部 1.0/12.0
90	I 3	S D01	1層	瀬戸釉陶	窓	—	残存3.4	8.4	密	良	SY7/1 灰白色	底 部 3.0/12.0
91	H 1	S X01	1層	土製品	不明土製品	9.0	残存9.2	—	中々良	中々不良	SYR6/6 塗色	口縁部 2.3/12.0
92	I 4	—	—	土製品	不明土製品	—	残存13.0	—	密	小良	SYR6/8 塗色	—
93	F 3	—	—	土製品	不明土製品	—	残存11.8	—	粗	不良	SYR5/8 塗色	—
94	I 3	S D01	1層	土製品	瓦塔	輪徑 11.0	残存高19.2	—	密	良	NE/ 灰色	最 部 1.9/12.0
95	D 3	—	—	石製品	太極石	残存長 8.3	最大幅 6.4	最大厚 4.5	重量	—	—	—
96	E 3	S D01	1層	石製品	刷片	最大長 6.6	最大幅 2.7	最大厚 1.8	重量	—	—	—
97	E 4	—	—	石製品	叩き石	最大長 10.8	最大幅 9.2	最大厚 6.6	重量	—	—	—
98	G 4	S K03	2層	金属製品	鉛石	残存長 4.7	幅 0.8	—	1124.0 g	—	—	—

第4表 遺物観察表(2)



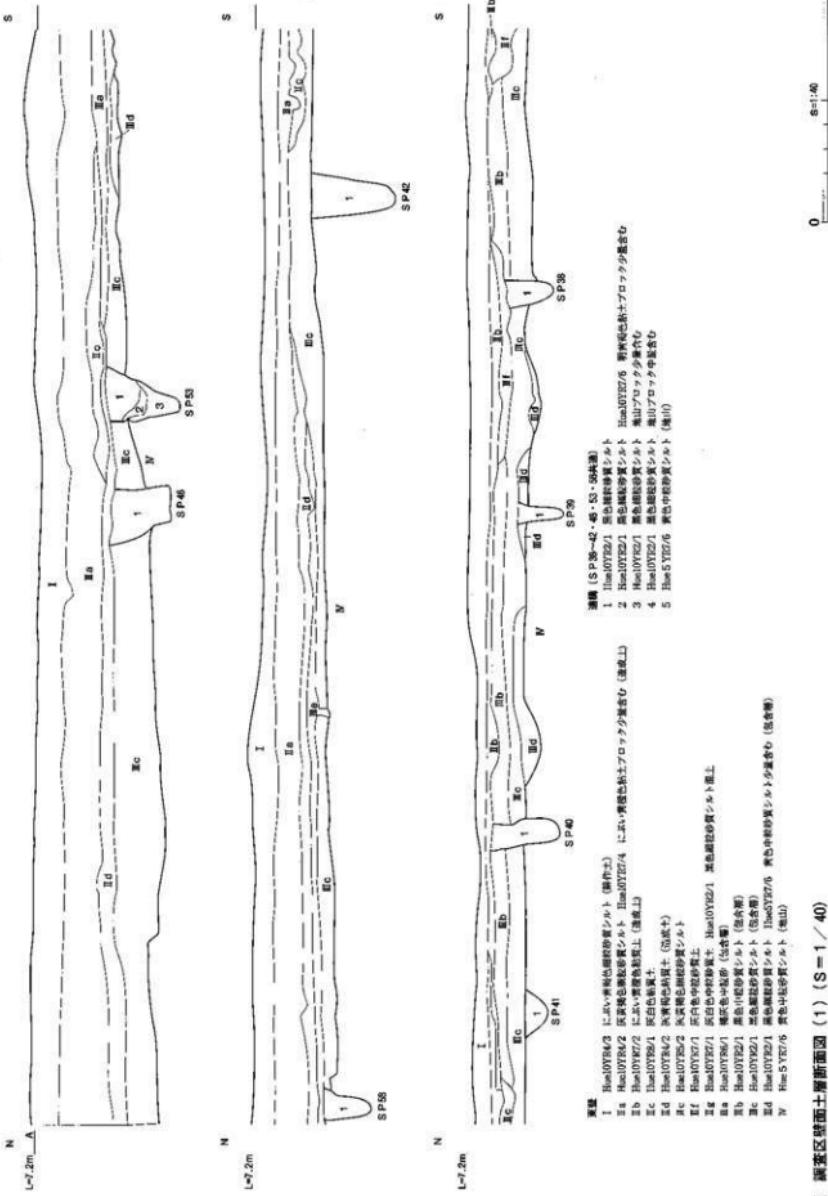
第7図 調査区全体図 ( $S = 1/200$ )

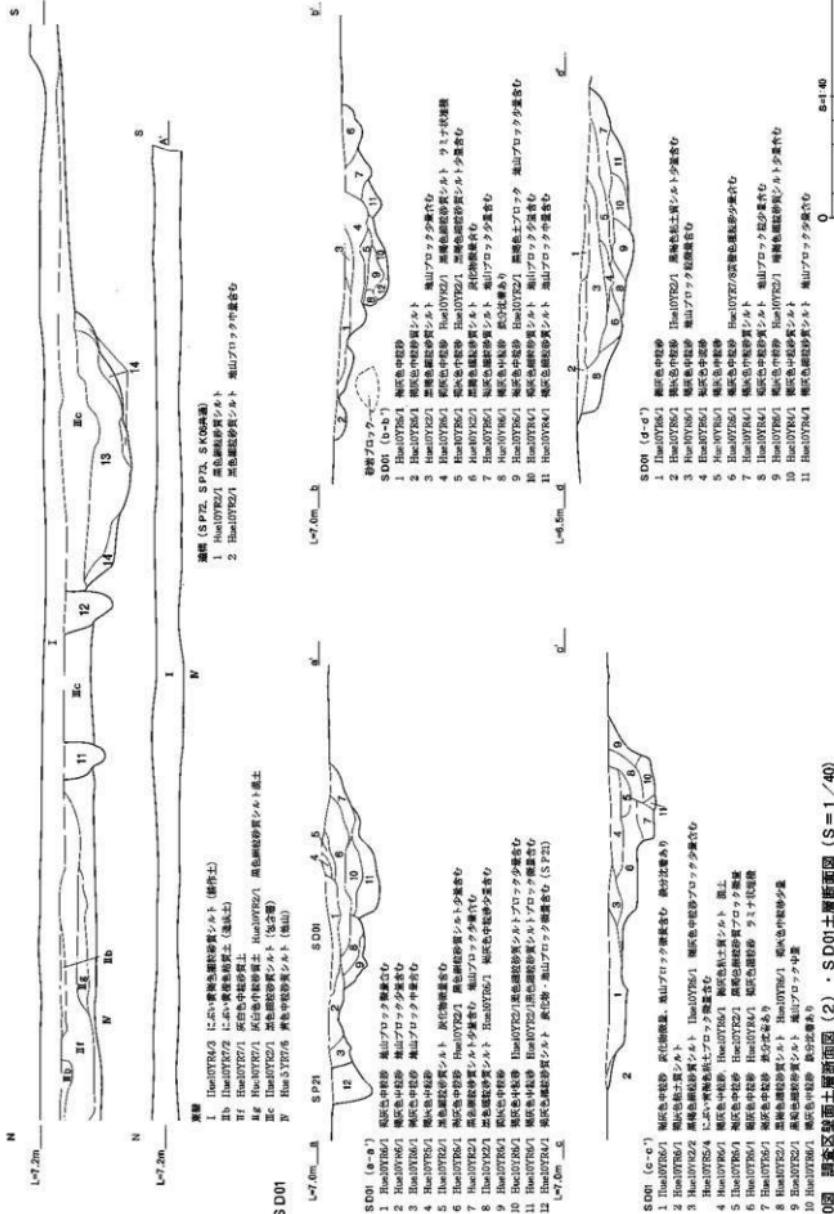
平面直角座標系第VII系 ( ) で表している座標値は日本測地系



第8図 遺構配置図 ( $S=1/100$ )

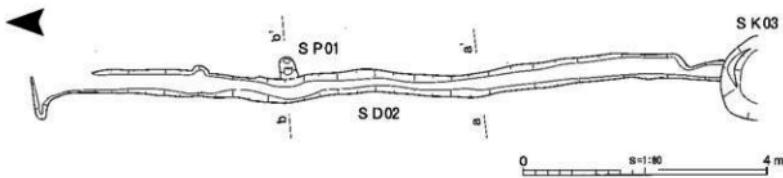
砂岩





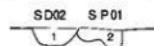
第10回 調査区鉛白土層断面図（2）・SD01土層断面図（S=1 / 40）

S D02



L=6.8m b

b'



S D02 (b-b')

- 1 HueloYRK2/1 黒色細粒砂質シルト  
2 HueloYRK2/1 黒色細粒砂質シルト 地山ブロック少含む

L=6.8m a

a'



S D02 (a-a')

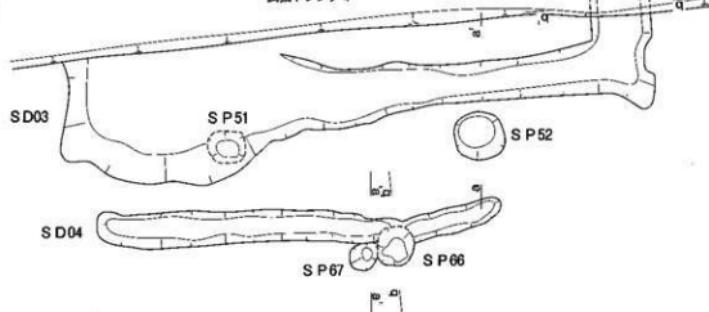
- 1 HueloYRK2/1 黒色細粒砂質シルト

0

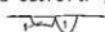
S=1:40

2 m

試掘トレンチ4



L=7.0m a SD04 SP67 b'



SD04 (a-a')

- 1 HueloYRK2/1 黒色細粒砂質シルト

L=7.0m a SP52 SD03 b'

SD03 (a-a')

- 1 HueloYRK2/1 黒色細粒砂質シルト しまり弱い

SP66 SD04

L=7.0m b b'



SD04 (b-b')

- 1 HueloYRK2/1 黒色細粒砂質シルト  
2 HueloYRK2/1 黒色細粒砂質シルト

L=7.0m b

b'

SD03 (b-b')

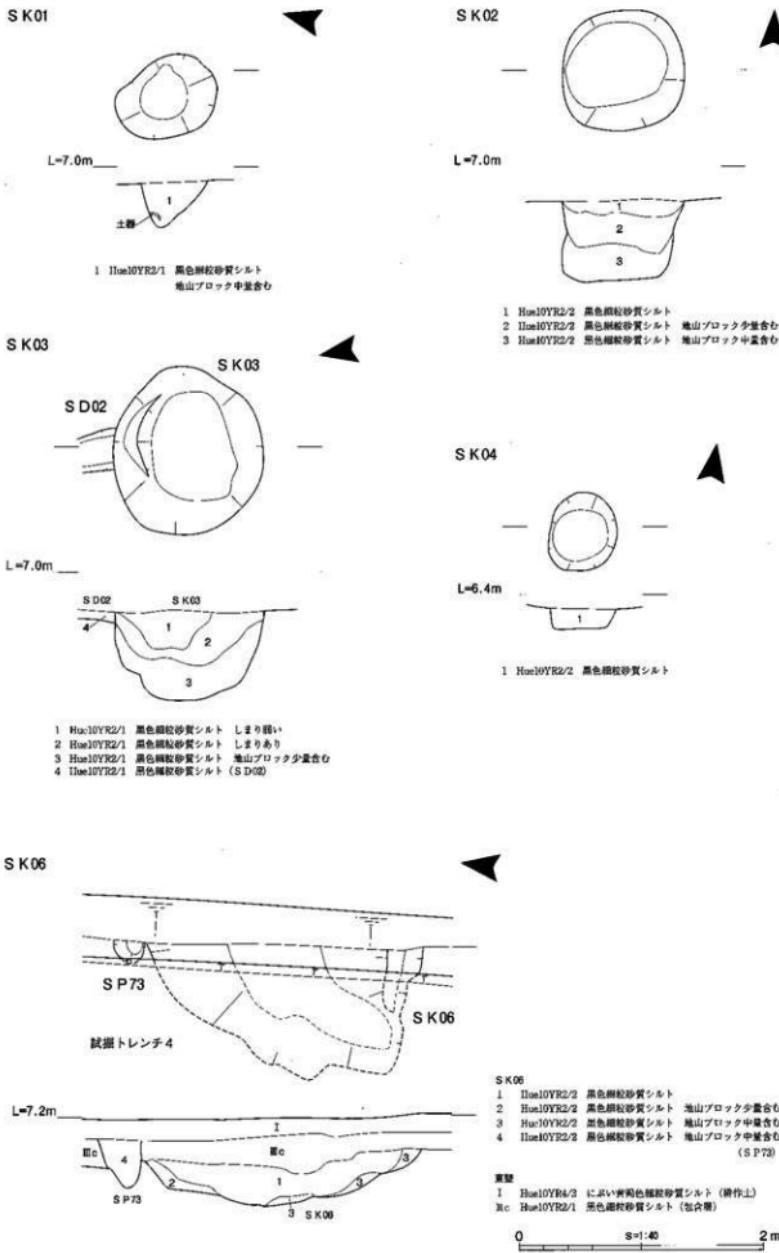
- 1 HueloYRK2/1 黒色細粒砂質シルト

0

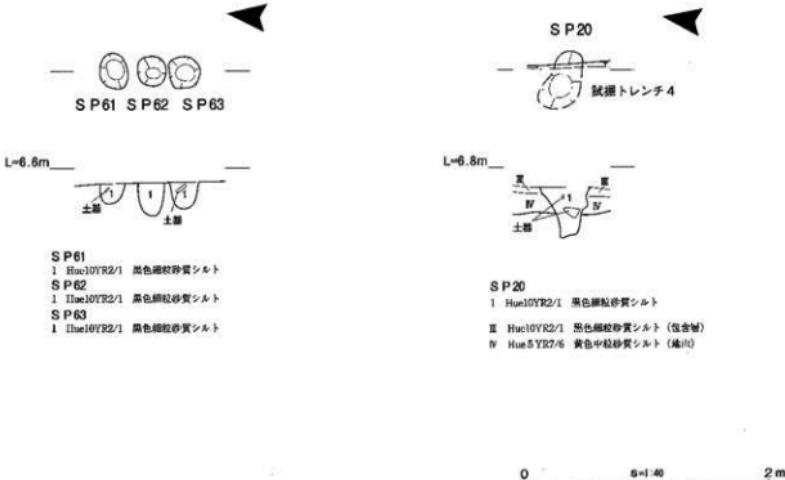
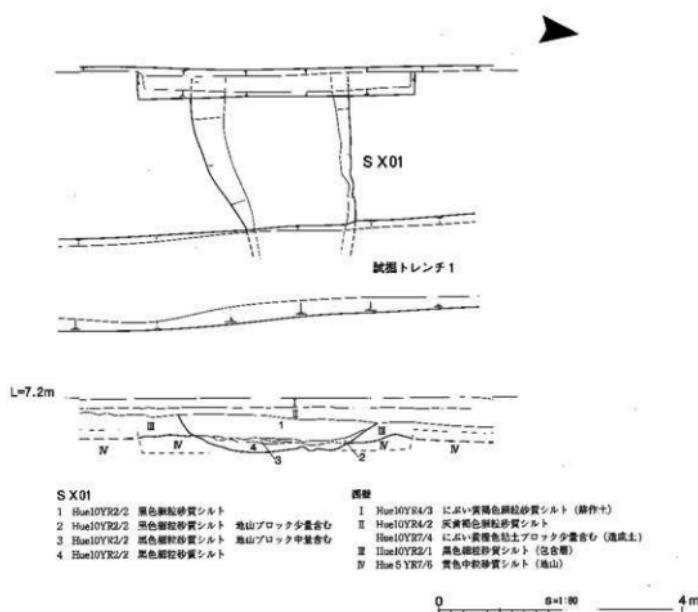
S=1:40

2 m

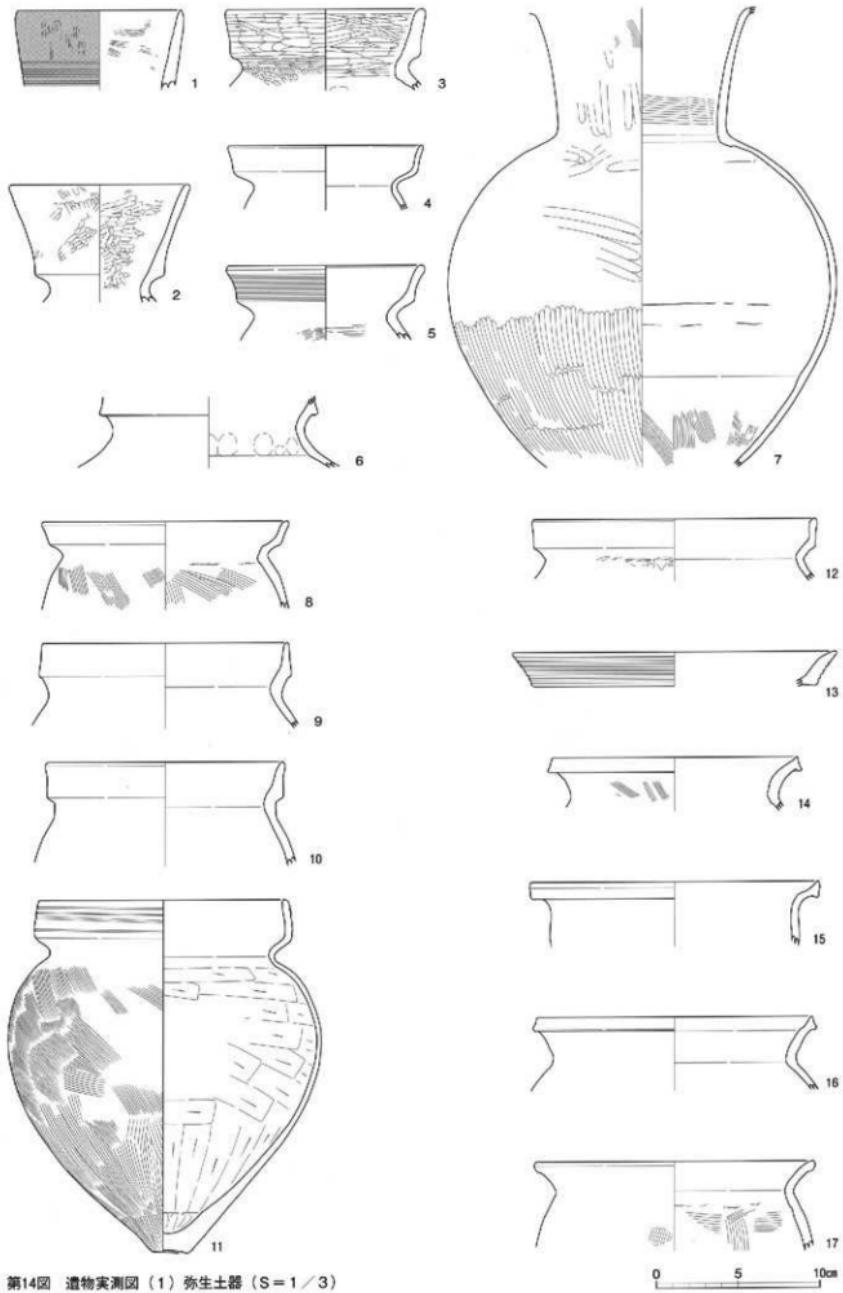
第11図 遺構実測図 (1) S D02 (平面図 S = 1 / 80, 断面図 S = 1 / 40)  
SD03・SD04 (平面図・断面図 S = 1 / 40)



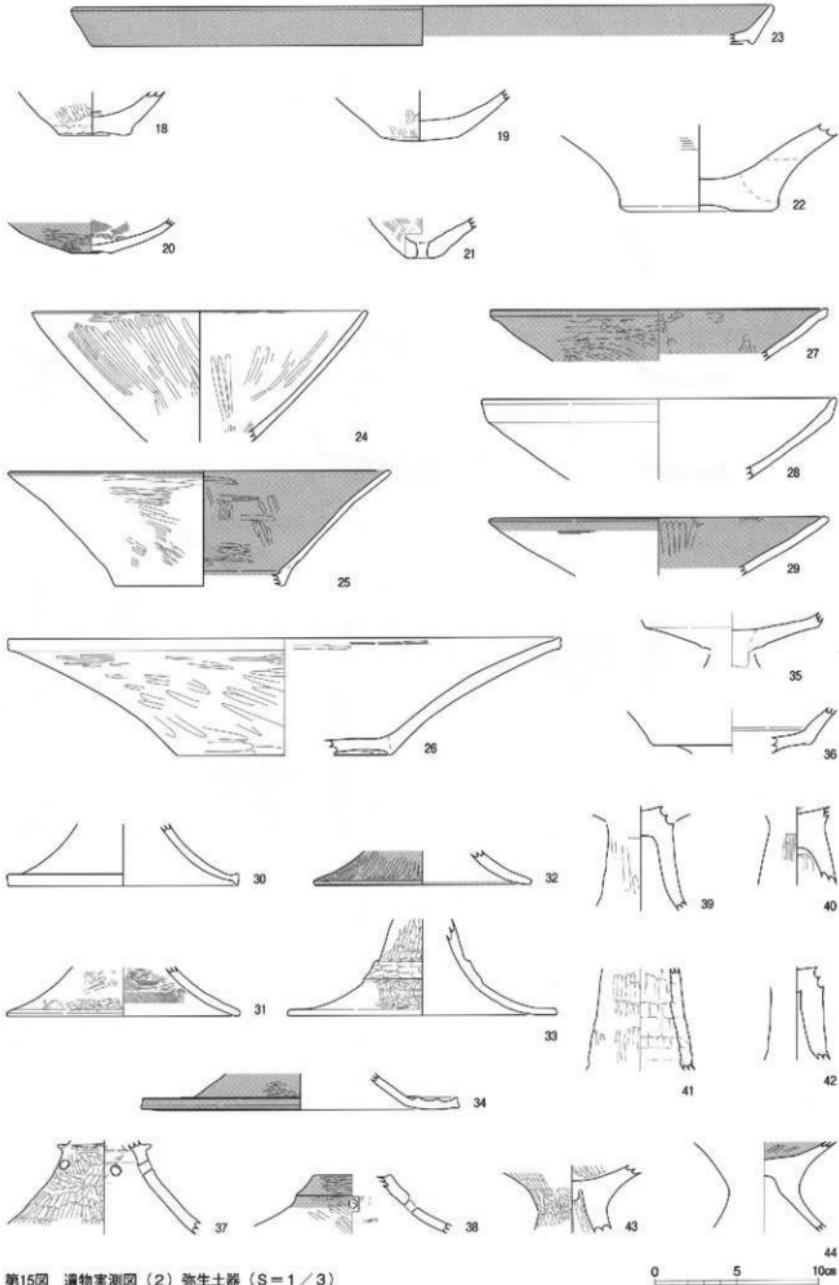
第12図 遺構実測図(2) SK01・SK02・SK03・SK04・SK06(平面図・断面図 S=1/40)



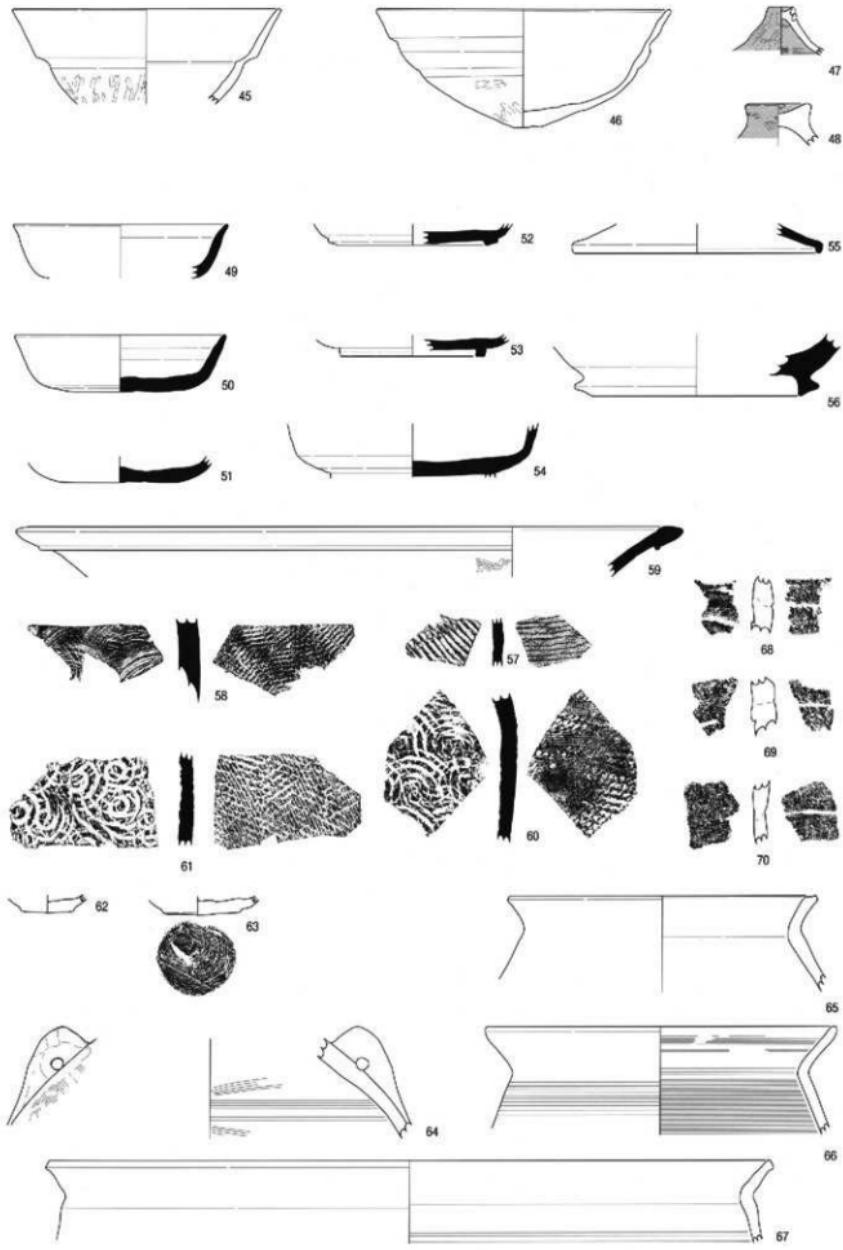
第13図 造構実測図 (3) S X01 (平面図・断面図 S = 1 / 80)  
S P20・S P61・S P62・S P63 (平面図・断面図 S = 1 / 40)



第14図 遺物実測図 (1) 弥生土器 ( $S = 1/3$ )

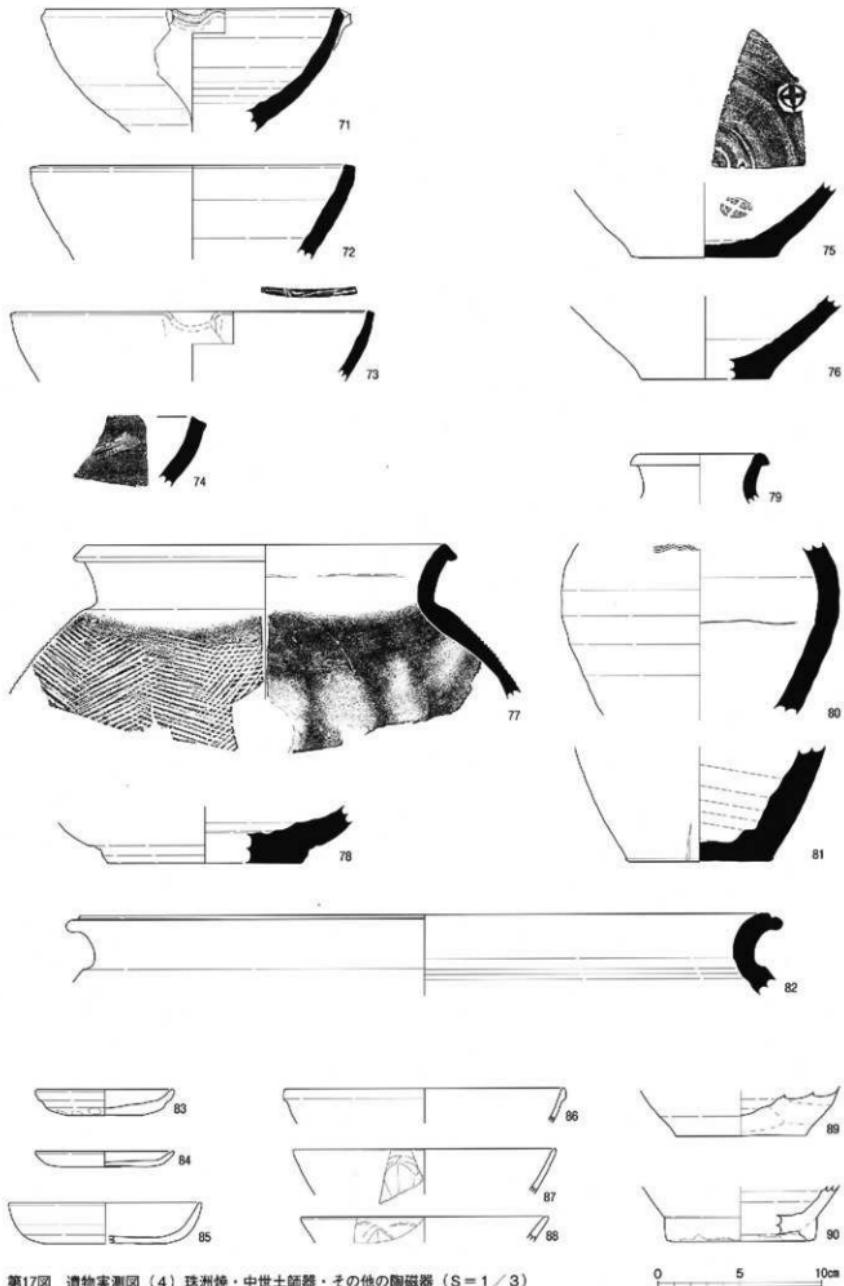


第15図 遺物実測図(2) 弥生土器 (S=1/3)

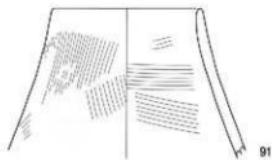


第16図 遺物実測図（3）弥生土器・須恵器・土師器（S=1/3）

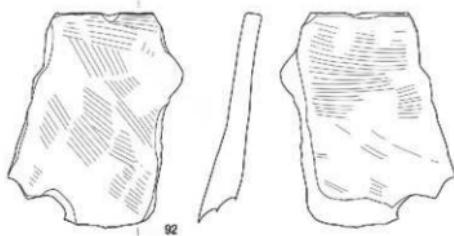
0 5 10cm



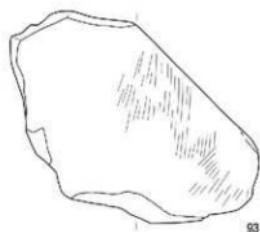
第17図 遺物実測図（4）珠洲焼・中世土器・その他の陶磁器 ( $S = 1 / 3$ )



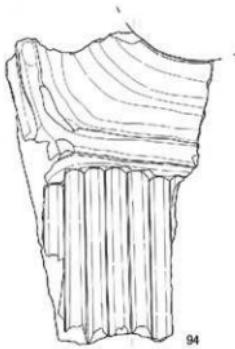
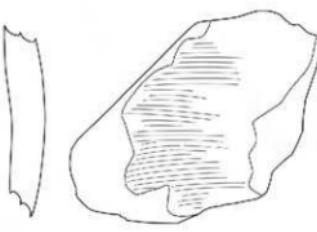
91



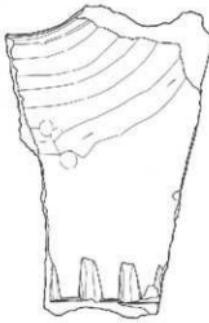
92



93

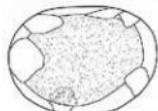
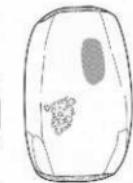
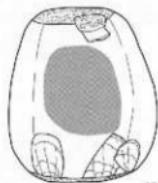
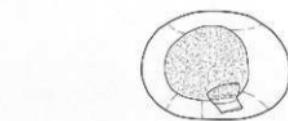
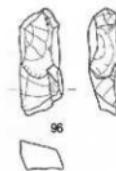
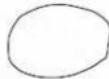
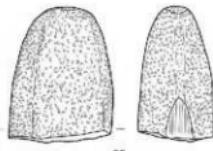


94

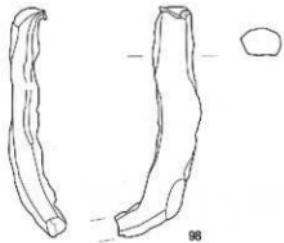


第16図 遺物実測図 (5) 土製品 (S = 1 / 3)

0 5 10cm



0 5 10cm



0 5cm

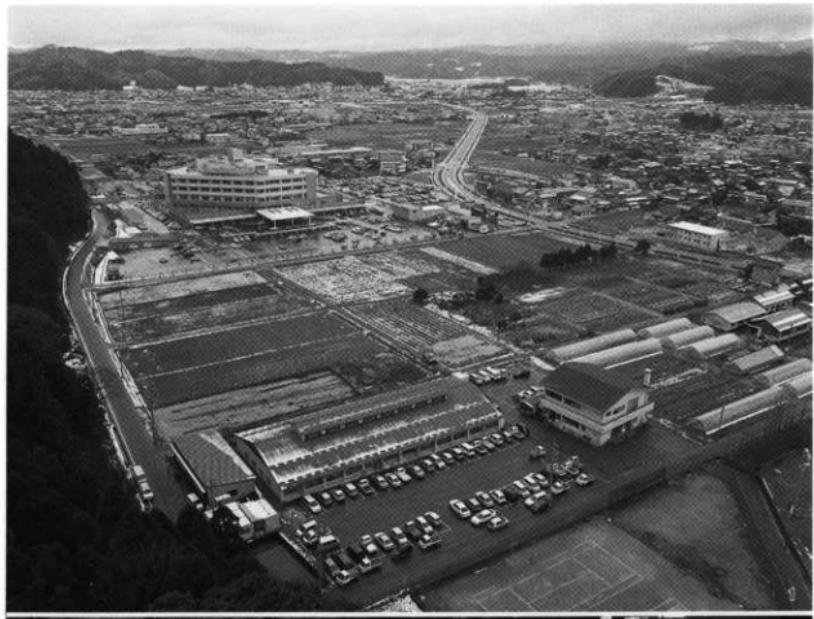
第19図 遺物実測図（6）石製品・金属製品 ( $S = 1/3, 1/1$ )



図版2　遺跡周辺空中写真　　白丸が鞍川E遺跡の位置  
米軍撮影の空中写真（1947年撮影）



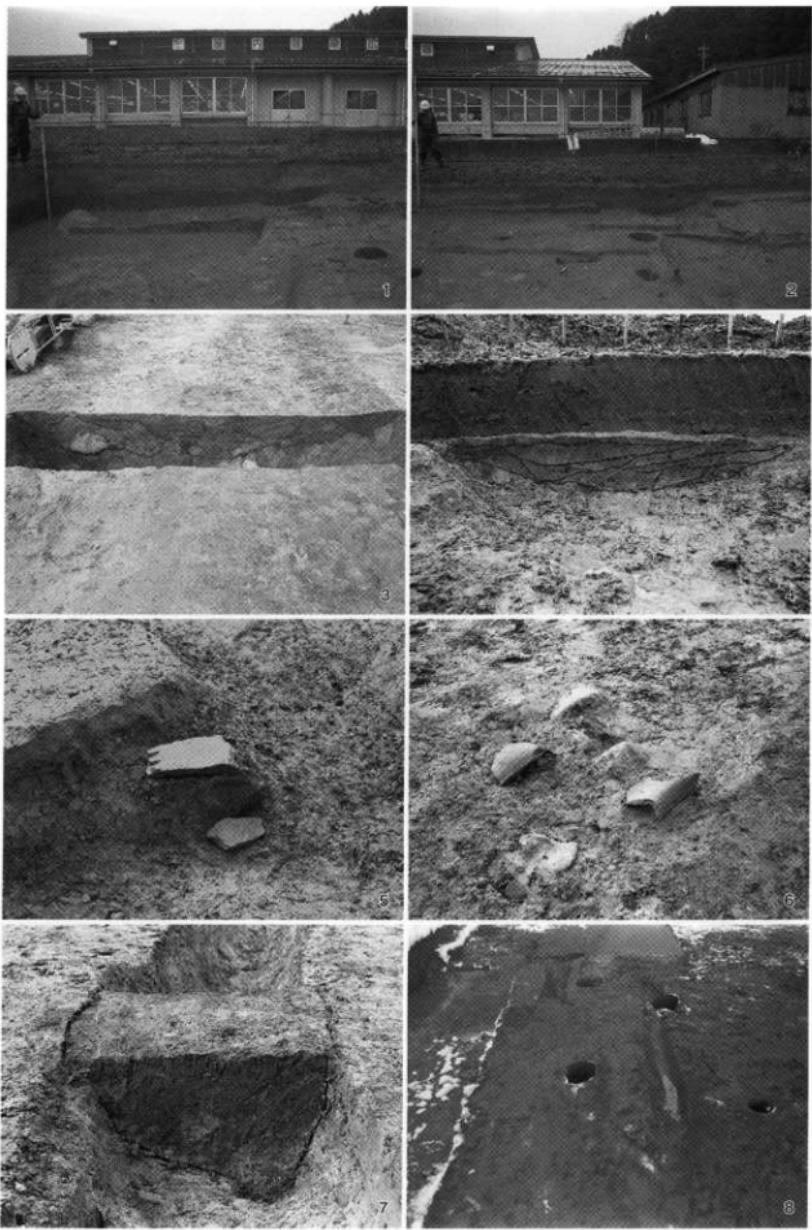
図版3　遺跡周辺空中写真　白丸が鞍川E遺跡の位置  
国土地理院撮影の空中写真（1963年撮影）



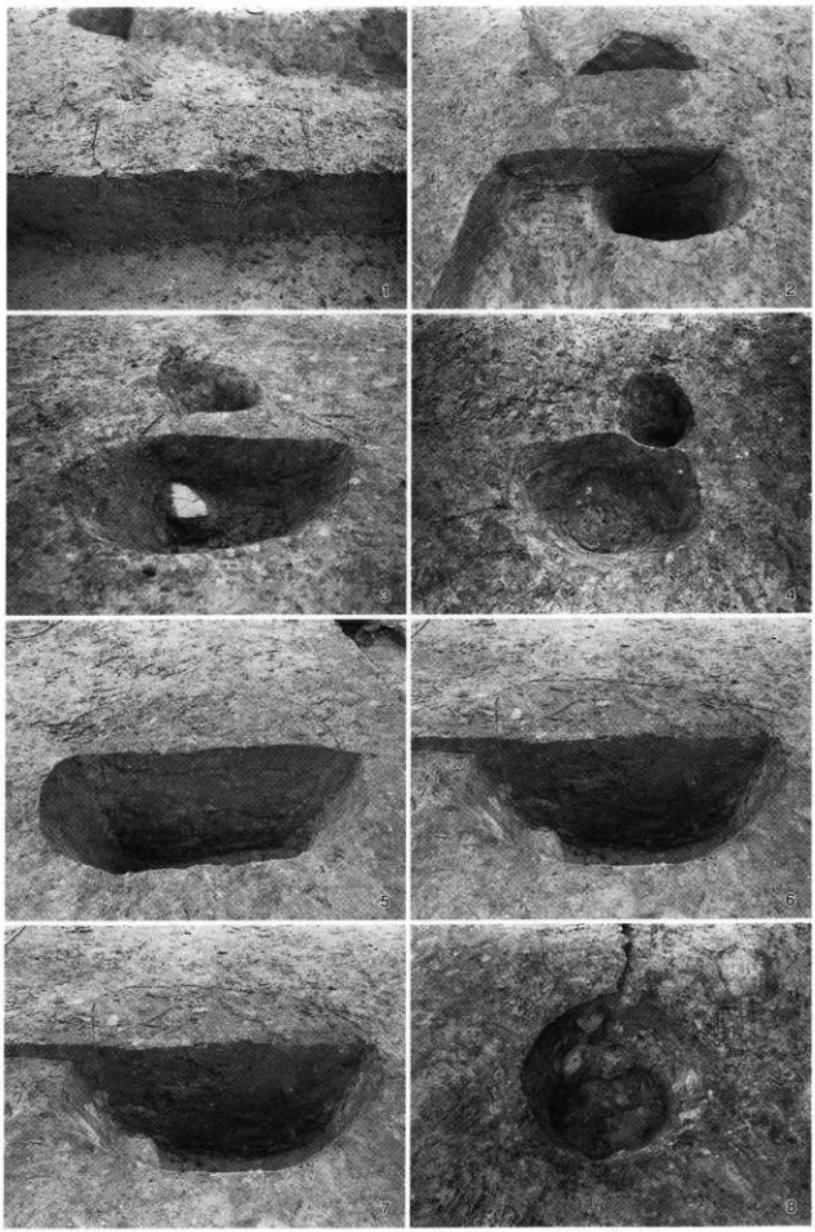
図版4 1. 調査区遠景（東から） 2. 調査区全景（垂直）



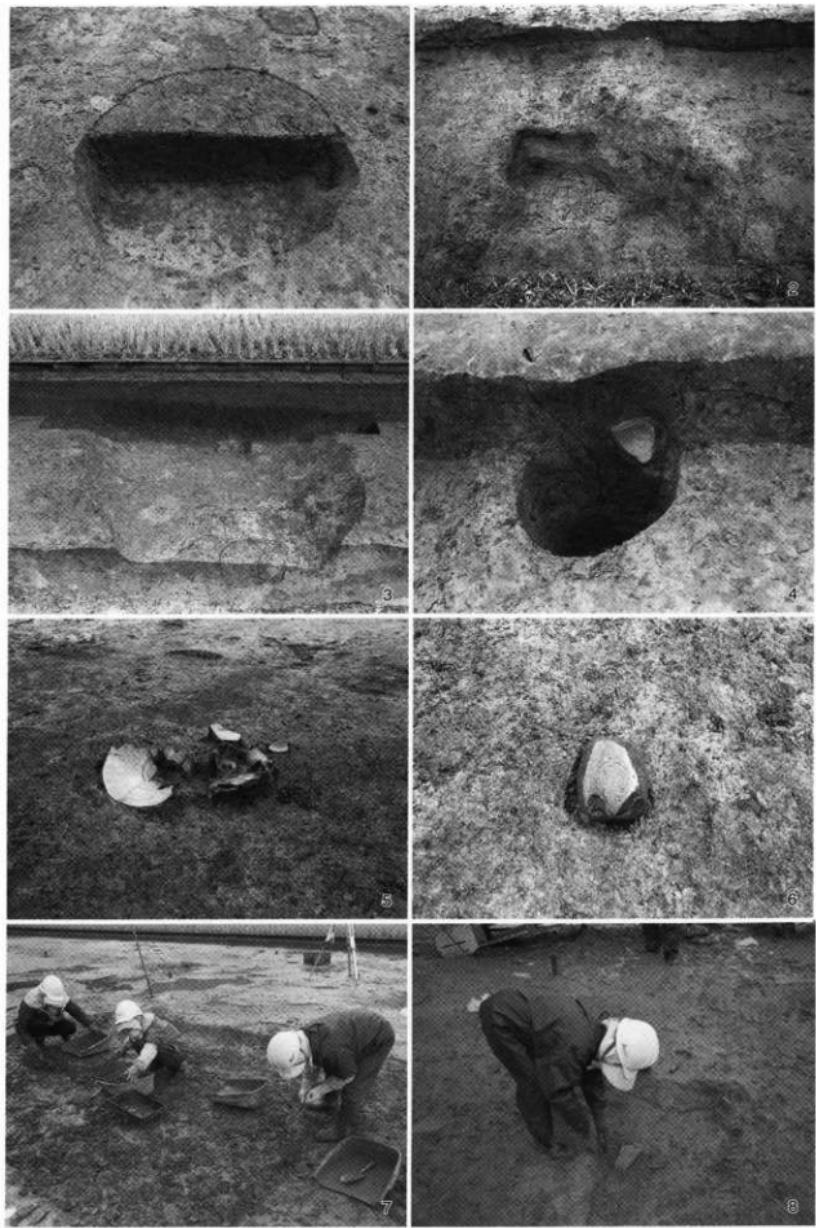
図版5 1. 調査区北東部全景（垂直） 2. 調査区遺構検出状況（北から）



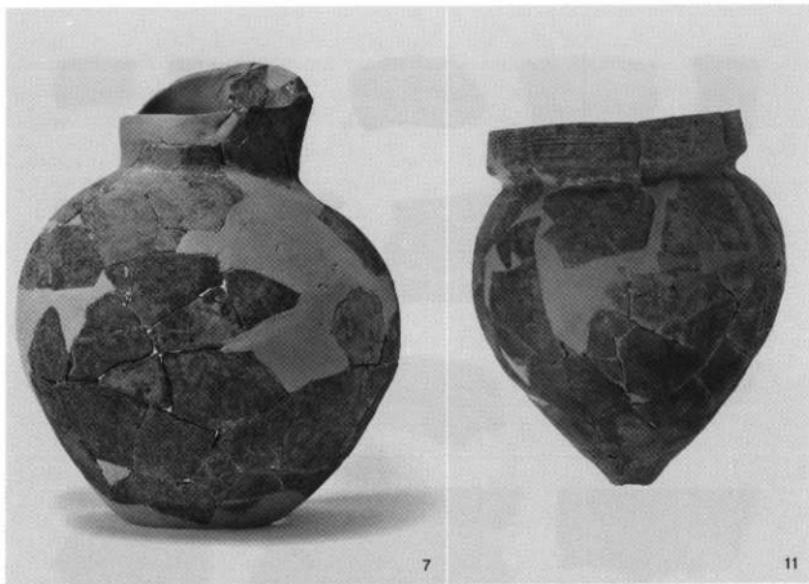
図版6 1. 調査区北側土層断面（西から） 2. 調査区南側土層断面（西から） 3. SD01土層断面b（南から）  
 4. SD01土層断面d（南から） 5. SD01遺物出土状況（1）（北東から）  
 6. SD01遺物出土状況（2）（南東から） 7. SD02土層断面b（南から）  
 8. SD03・SD04発掘状況（北から）



図版7 1. SD03土層断面b（東から） 2. SD04土層断面a・SP67土層断面（北から）  
3. SK01土層断面（南西から） 4. SK01完掘状況（南から） 5. SK02土層断面（南から）  
6. SK02完掘状況（南から） 7. SK03土層断面（西から） 8. SK03完掘状況（南から）



図版8 1. SK04土層断面（南から） 2. SK06完掘状況（東から） 3. SX01土層断面・完掘状況（東から）  
 4. SP20土層断面（西から） 5. 包含層遺物出土状況（1）（北西から）  
 6. 包含層遺物出土状況（2）（東から） 7・8. 作業風景

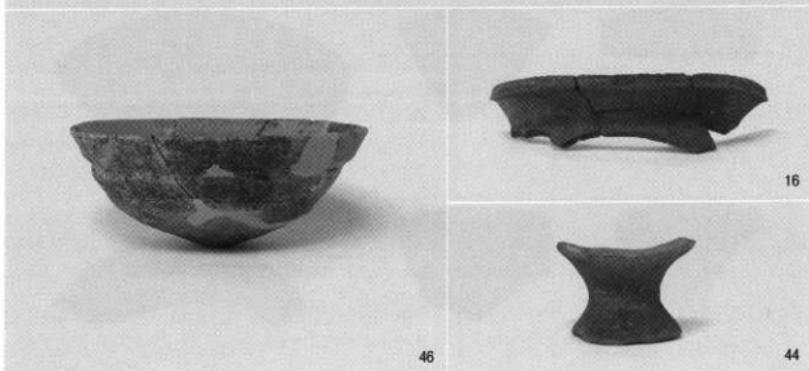


7

11



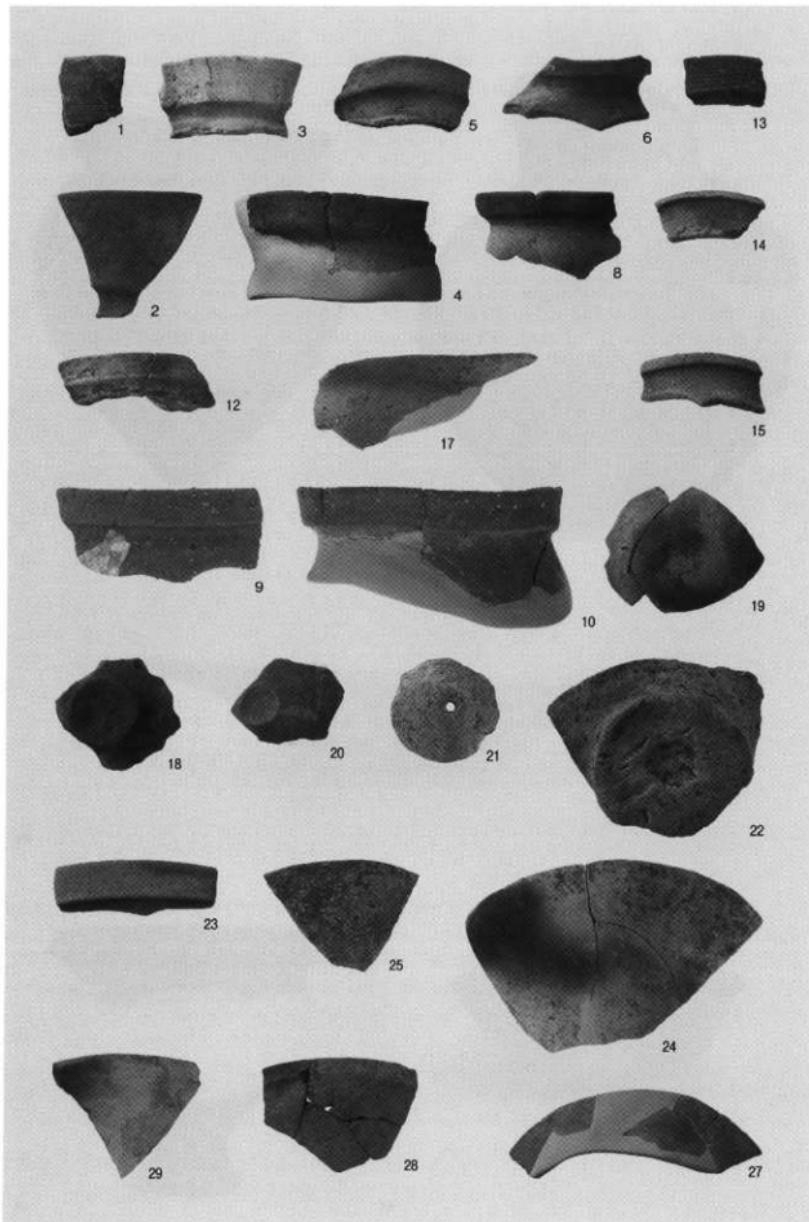
26



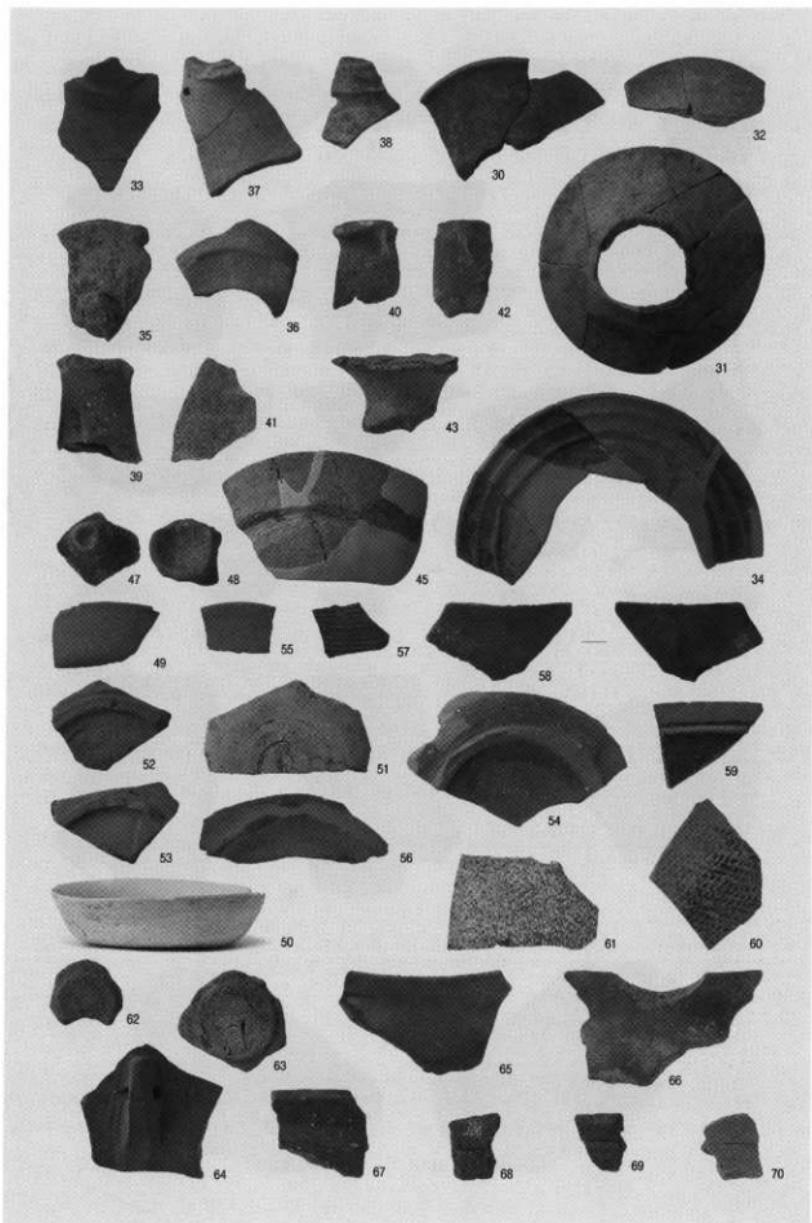
46

44

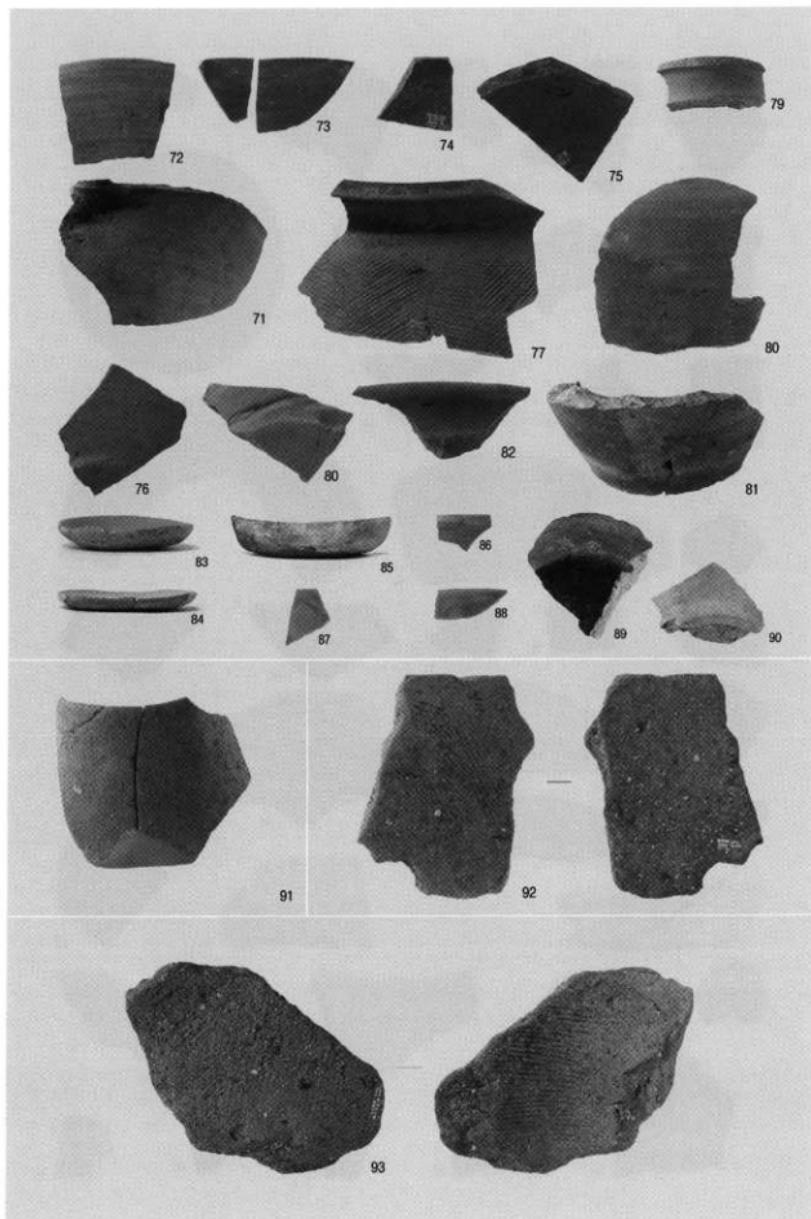
图版9 遗物写真（1）



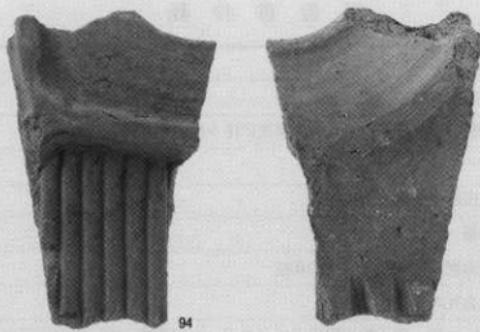
図版10 遺物写真(2)



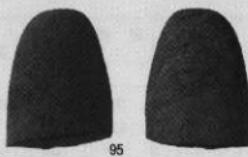
图版11 遗物写真（3）



図版12 遺物写真(4)



94



95



97



96



98

图版13 遗物写真（5）

# 報告書抄録

ふりがな	くらかわいーいせきいち						
書名	鞍川E遺跡I						
副書名	市道鞍川塗峰線バイパス整備事業に伴う発掘調査報告						
卷次	1						
シリーズ名	永見市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第60冊						
編著者名	廣瀬直樹、岡田一広、吉田有里						
編集機関	株式会社エイ・テック						
所在地	〒939-1119 富山県高岡市オフィスパーク12番地 TEL 0766(62)0388						
発行機関	永見市教育委員会						
所在地	〒935-0016 富山県永見市本町4番9号 TEL 0766(74)8215						
発行年月日	2012年3月16日						
ふりがな 所収遺跡	所在地	コ ー ド	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村 遺跡番号	.. ..	.. ..	.. ..			
鞍川E遺跡	富山県永見市 鞍川	16205	394	36° 47° 26°	137° 03° 02°	20111031 20111222	840m <sup>2</sup> 道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
鞍川E遺跡	散布地	弥生 古代 中世	流路、溝、土坑 ピット、不明遺構	弥生土器、土師器 須恵器、珠洲焼 中世土師器 土製品（瓦塔） 石製品（大型蛤刃 石斧・敲石）	中世の流路を検出し、 弥生土器・土師器・ 須恵器・珠洲焼・瓦 塔が出土した。		
要約	中世の自然流路を検出し、弥生時代、古墳時代、古代、中世の遺物が出土した。弥生時代の遺物は弥生時代終末期の白江式期のものである。古墳時代の遺物は古墳時代後期の須恵器である。古代の遺物は須恵器・土師器とともに瓦塔が出土しており、時期は8世紀末～9世紀代である。中世の遺物は中世土師器・珠洲焼・白磁・青磁が出土しており、時期は12世紀後半～13世紀前半を主体とする。民俗資料のトチムキ石に酷似した敲石が出土している。						

平成24年3月13日印刷  
 平成24年3月16日発行  
 永見市埋蔵文化財調査報告第60冊

## 鞍川E遺跡I

市道鞍川塗峰線バイパス整備事業に伴う発掘調査報告（1）

編集 株式会社エイ・テック

発行 永見市教育委員会

印刷 富山スガキ株式会社